

ネパールのカースト社会における観光産業と社会的弱者 — 観光都市ポカラの発展と少数民族タカリの健闘 —

Tourist Industry of the Caste Society and the Socially Vulnerable in Nepal:
Development of Pokhara as Tourism Town and Strenuous Effort
by Thakalis of an Ethnic Minority Group

山 本 勇 次

要 約

ネパールのカースト制度は、1854年発布の「ムルキ・アイン」と言う法律で国家権力により導入されている。その残滓は現在のポカラにも残っており、最上級は最も清浄な「バフン」、その次に「チェットリ」があり、「マトワリ」（酒飲みカースト）と称されるモンゴロイド系諸族（各々チベット・ビルマ語族系母語を持つ）は、浄カーストながら、第三位におかれている。そして不浄とされる「ナチュネ」（ダリット）は最下層に置かれ、今でも差別を受けている「社会的弱者」である。しかし、ネパール王国が「シャストラ」（ヒンドゥー政体）体制を維持する限り、最上位カースト、バフン・チェットリの占有する政治権力から排除されているマトワリも、ネパールでは「社会的弱者」なのである。

最初のポカラへの入植民はバフンとチェットリで、彼らはポカラ盆地の肥沃な農地を占有した。1960年代にポカラ盆地のマラリア撲滅後に、周辺山地民のマトワリ諸カースト群がポカラに降りてきたが、農地は残されておらず、農業以外の生業に生きる道を選んだのである。観光産業はその一つの選択であった。とりわけタカリ族は、1959年に「塩の道」の交易が閉鎖されると、根拠地のタコーラを離れて、ポカラに来てフェワताल湖岸に滞在する欧米諸国の若者を相手にロッジやゲスト・ハウスを始めたのが、ポカラにおける観光産業の始まりであった。1950年に開国したネパールは、1952年にポカラ空港が作られ、1969年、続いて1972年には高速道路でインド国境のバイラワや首都カトマンドゥと結ばれると、1960年代に先進諸国で始まった「マス・ツーリズム」のブームに乗った欧米諸国や日本から若者達が押し寄せて、一気にポカラの観光産業は花咲き始めたのである。

筆者は、1982年末から83年初頭にかけて、ポカラで24人のネパール人学生を指揮して全戸調査を実施し、その調査結果を元に、ポカラ・センサス・データ

ベースを構築した。本稿の考察は、その時の「職業項目」を集計した「カースト別職業構造」を踏まえてなされている。この職業項目は19種類の職業カテゴリー群が類別されているが、「観光産業」とは、「ホテル・ロジ・ゲストハウス、レストラン、ティーショップ、竹細工（籠）・チベット絨毯・タンカ（曼荼羅）などの土産物販売店、観光・トレッキング会社などへの就業者の総体」である。このカースト別職業構造から、カースト別「観光産業就業率」を計算すると、マトワリ・カースト群が一番高くなる。とりわけタカリ族は抜群に高い。注目されるのは、ナチュネはまだ「汚れ」へのスティグマが払拭されておらず、接客業である観光産業への就業率は最低であり、マトワリと対照的な違いを見せている。

本稿は、少数民族のタカリ族が政治的差別を受けている社会的弱者でありながら、それを逆手にとってポカラの観光産業発達に貢献した理由を解明しようとしている。その理由は、① 彼らはヒマラヤの商業民として、既に観光産業を推進するにたる「文化資本」を蓄積していた、② 彼らが少数民族だったからこそ逆に、部族全体の内部結束を強化し、観光産業育成の「ギルド」的結束ができたこと、③ 良き指導者が存在したことなどであろう。

Abstract

The legacy of Nepalese caste system initiated by *Muluki Ain* in 1854 has been still remaining in Pokhara. The Dalit (*Nachhune*) are well-knownly the “socially vulnerable” in India and Nepal. A group of Mongolian ethnic groups called “*Matwari*” (alcohol-taking castes) can be also regarded to be the socially vulnerable in Nepal because the kingdom of Nepal has been molded on an ancient Hindu-religious polity (*Shashtra*). Under this polity *Matwari* groups such as Gurungs, Magars and Thakalis have been excluded from the central political machines.

Pokhara was inhabited firstly by Bahuns and Chhetris. *Matwali* groups started living in Pokhara valley after WHO's eradication of Malaria in early 1960s, but they could not find any good agricultural lands that had already been distributed by Bahuns and Chhetris. The Thakalis came down to Pokhara after the salt-trade path between India and Tibet was closed in 1959 by China. Arriving at Pokhara, they have established tourist business such as hotels, restaurants and teashops in north-side of Lake *Fewa* where Western visitors started gathering as a preliminary pilot of a rising mass tourism among industrialized nations in 1960s. Two highways, one to Bhairawa built in 1969 and

another to Kathmandu in 1973, have guided a mass of Euro-American and Japanese back-packers to Pokhara. This is the beginning of flourishing tourist industry in Pokhara.

The present author conducted a door-to-door survey of the entire Pokhara households in 1983. The data collections were made by 24 Nepali students and all the results of the survey were kept in the form of “Pokhara Census Database”. This database includes a list of occupations by all the above-6-years-old dwellers in Pokhara. Their occupations were categorized into 9 different kinds; one of them is “tourist industry” in which all the owners and workers of hotels, guest-houses, restaurants, teashops, souvenir-shops, tourist and trekking offices. Based on our calculations from this database we came to conclude that the Matwalis are the most dominant participants in tourist industry comparing with Bahuns, Chhetris and Dalits, and that the Thakali participation-ratio of tourist industry is the second highest of all the Matwali castes. Although the Sherpas are the first, the actual number of the Sherpa is too small to argue adequately.

We would argue that the Thakalis are endowed with three good reasons for their success of developing tourist industry in Pokhara. First, they have already accumulated good “cultural capitals” for establishing tourist business thanks to their previous experiences as Himalayan traders. Second, their population is not so large that all the members have intentionally tried not to breach the intra-caste unification. This is why they reversively succeeded in organizing a tourist-industry “guild” in Pokhara. Third, they are blessed with good domestic leaders following their Tibetan Buddhist traditions.

キーワード：ネパール、ポカラ、タカリ族、観光産業、社会的弱者

Key words：Nepal, Pokhara, Thakalis, Tourist Industry, Socially Vulnerables

I ムルキ・アインによるカースト制度導入

カトマンドゥ盆地にあったネワール王朝を攻め滅ぼしたグルカ王朝は、ネパール全土を征服後、インドから北上してきた英国植民地軍と衝突し、英国ネパール戦争（1814-15年）となる。この戦争に敗戦したグルカ王朝は、タライ地

方を割譲させられただけでなく、その直後に宮廷内紛が勃発する。この内紛をクーデターで収拾したのは、ジャン・バハドール・ラナであった。ラナ將軍はネパール王を蟄居させ自らが摂政宰相として実権を掌握し、1854年にはネパール最初の成文法「ムルキ・アイン (*Muluki Ain*)」を制定する。この法律こそが、古代ヴァルナ・モデルを基にした「カースト制度」をネパールにもたらししたのであった。そのカースト制度の残滓は今でもネパール人の社会的意識の中に影を残している。

ムルキ・アインの制定には、二つの政治的配慮が込められていたと思われる。第一の配慮は、急速な武力制覇で1792年にネパール全土を政治統一したものの、それから60余年が経ち、グルカ王朝の急速な領土膨張により拡大した行政機構が混乱していた。シャルマ (1977: 278) によれば、その頃ネパール中で行政官による法解釈の矛盾や混乱が起こっていた。この行政的矛盾・混乱を救うため、ネパール全国を統治する法的基盤の確立が望まれたのである。第二の配慮は、ネパール全土の平定により、グルカ王朝は極めて異なる三系の民族集団群、つまり「バフン (*Bahun*)」、「チェットリ (*Chhetri*)」等のインド・アーリアン系ヒンドゥー教徒たちと、チベット・ビルマ語族系の母語を持つモンゴロイド系諸集団、それに被征服民ネワール族を同一の国家体制のなかに統合する必要があった。ムルキ・アインにより、グルカ王朝の権力基盤にあった「パルバティ・ヒンドゥー」(バフン・チェットリ) を最上位に置き、他の異なる民族集団群を、それよりも下位の身分階梯秩序に定位付ける必要があった。人種的に見れば、「モンゴロイド系」と「地中海系」人種、ならびに両者の混血種に分けられ、言語による民族的差異によれば「チベット・ビルマ語族系」民族集団群と、「インド・ヨーロッパ語族 (インド・アーリア) 系」民族集団群とに二分される。これら二系の人種の区分と二系の民族的区分とは、実際に重なり合う部分が多い。結果としてグルカ王朝下のネパール国民は、(1)「インド・ヨーロッパ語族系地中海系人種」である「タガダリ」、(2)「チベット・ビルマ語族系モンゴロイド系人種」である「マトワリ (*Matwari*)」から構成されている。こ

の様に対照的な二系とその混血が生み出した「民族集団（ジャート、カースト）」群は、今では40種類以上にもなる（Bista, 1980）。

ムルキ・アインは、全ジャート群を五つの儀礼的階級序列に階層化し、各々の序列群に属する夫々のジャート群をもさらに副次的に序列化している（Höfer, 1979: 45）。第一儀礼的階級は「タガダリ（*Tagadhari*：再生族）」と呼ばれる。タガダリとは、清浄カーストを象徴する「ジャナイ（聖紐）」を身につける事を許される、「ブラーマン」、「ラージプート（タクリ・チェトリ）」、「チェトリ」、「ネワール・カーストの上位カーストの人々」が含まれている。従って、ムルキ・アインでもグルカ王朝の中核の人々であるバルバティ・ヒンドゥ（ブラーマン、タクリ・チェトリ、チェトリ達）が、タガダリとしてカースト制度の最上位に祭り上げられており、「それら以外のジャートには課せられた政府に対するある種の税金や強制労働の提供の義務などを免除される特権が、バフンとチェトリだけには与えられていた」（Caplan, 1970: 71）。

第二儀礼的階級は、「ナマシンヤ・マトワリ（*Namasinya Matwali*）」つまり「奴隷化されない酒飲みカースト群」である。このグループには、マガール、グルン、タマン等のチベット・ビルマ語族系母語をもつモンゴル人種系諸民族集団が入れられている。これらの民族集団は元来高地山岳民で、冬季の暖を取るため飲酒慣習を伝統的に保有していた。それに対して、低地の熱い平原出身であるため酒で暖を取る必要もなく、高カーストとして純粋性を誇示するバフン・チェットリ達は、自らのカースト規範として禁酒を課していた。従ってバフン・チェットリの視点から、モンゴロイド系諸民族集団の飲酒習慣は文化的特性として特別視されたのであろう。前者は後者を「マトワリ（飲酒者、飲酒カースト）」と呼ぶようになったのである。

基本的に非ヒンドゥ教徒で飲酒習慣を持つモンゴロイド系諸民族集団を第二階級に組み入れた理由は、グルカ王朝がかなり短い期間でネパール全土の軍事的制圧をしたことがチェトリ将兵のみの働きだけでは不可能であり、マガール族やグルン族などのマトワリ兵士たちの功績が大であったからであろう。現

在のネパール軍の部隊編成でも、高級将校はチェットリで、下士官以下の兵卒にはマトワリが多いのが目立つが、これはかつてのグルカ王朝軍の伝統から来ているものであろう。続いて第三の儀礼的階級には、「マシンヤ・マトワリ (*Masinya Matwali*)」と呼ばれた「奴隷にされうる飲酒カースト群」が配置されている。それらの中には、「ボテ (*Bote*: チベット人)」、「クマール (*Kumar*: 壺作りカースト)」、「タルー族 (*Taru*)」、「ガルティ (*Gharti*: 解放奴隷の子孫)」等が含まれている。ネパールにいる北方のチベット族、南方の「タルー (*Taru*) 族」のような少数民族の存在が注目される。この第三儀礼的階級までが「浄カースト群」であり、それより下の第四、第五儀礼的階級は、「不浄カースト群」となる。

第四儀礼的階級は、「不浄なれど水を受け取れるカースト群」である。これには、「カサイ (*Kasai*: ネワール畜殺業者)」、「クスレ (*Kusre*: ネワール音楽師)」、「ドビ (*Dobi*: ネワール洗濯業者)」、「クル (*Kuru*: ネワール皮加工業者)」、「ムレック (西欧人)」等が含まれている。ネワール系の低カースト群と共に、当時のネパール人が英ネ戦争の結果唯一接触せねばならなかったイギリス人もこの階級に入れられていることが、大層興味深い。(この事実は、イギリス人を含めて西欧人が牛肉を食べていたことによるからであろう。) カースト規範では、誰から水・食物を貰え、誰から貰えないかということは、大問題である。水や食物をより不浄な者から受け取れば、受け取った人が不浄性に汚染されると信じられたからである。最下層の第五儀礼的階級として「不浄で水を受け取れないカースト群」が来る。このボトムの階級には、「カミ (*Kami*: 鍛冶師)」、「サルキ (*Sarki*: 皮加工師)」、「ダマイ (*Damai*: 裁縫・音楽師)」、「ガイネ (*Gaine*: 吟遊楽師)」、「バディ (*Bhadi*: 音楽師)」、「ボレ (*Pode*: ネワール漁師)」、「チャメ (*Chame*: ネワールごみ清掃夫)」等が含まれている。これらのカースト群は、「ナチュネ (*Nachhune*: 不可触民)」と呼ばれていたのである。

Ⅱ 現在のポカラのカースト制度と「社会的弱者」

ムルキ・アインで導入されたのは、五階級の儀礼的階級制度であったが、現在のポカラには四階級の儀礼的階級制度が残されている。その最高位が「バフン（ブラーマン）」、その次が「チェットリ（クシャトリヤのネパール語訛り）」、更に下がって第三位が「マトワリ」、最下位が「ナチュネ」つまり「ダリット（*Dalit*）」である。ポカラのカースト制度を、その儀礼的階級別の人口構成で見ると、下位階級のマトワリとナチュネとは、それぞれが更に「ジャート（*Jat*）」と呼ばれる基本的単位に分割されている。ただし、マトワリの中のジャート群同士、さらにダリットの中のジャート群の間では、どちらの儀礼的階級がより上位であるかに関して、ポカラ住民の間で統一見解はない（Yamamoto 1983: 4-6）。それらは「同一の儀礼的階級（*Varna*）に属している」と考えられている。

筆者は、1982年12月1日から1983年2月26日まで三ヶ月間をかけてポカラの全戸センサス調査を実施している。この調査のために、筆者は、24名のネパール人大学生を調査助手として組織化し、1年余かけて、彼らを訓練し、調査計画を立てた。この全戸調査の準備や実際のデータ収集方法に関しては別稿（山本・北村1989、1990）を参照してもらいたい。その調査結果は全てコンピュータに入力し「ポカラ・センサス・データベース」を作成した。このデータベースから1983年初頭のポカラの総人口を算出すると、49,768人となる。そのデータから労働可能年齢未満の5歳児以下を除外すると、ポカラの全労働可能人口の総数は、43,722人となっている。そのカースト別分布は、〈表1〉の通りとなる。

〈表1〉からジャート別の特色を眺めてみると、バフンがポカラ全人口の22.4%を占める最大ジャートで、第二位のチェットリが20.3%で追いかけている。第三位のマトワリ・カースト群（ネワール、グルン、タカリ、マガール、タマン、ボテ、ガルティ、ギリ、シェルパ、ライ）が総計44.4%、第四位のダ

表1 ポカラのカースト別労働人口(1983年当時、但し6歳以上)

(山本1989)

カースト名	バフン	チェットリ	ネワール	グルン	タカリ	マガール	タマン	ボ テ
人 口	9,784	8,879	6,507	7,689	874	1,910	289	572
比率(%)	22.37	20.30	14.88	17.58	1.99	4.37	0.66	1.31
カースト名	ガルティ	ギリ	シェルパ	ライ	ダマイ	カミ	スナール	ガイネ
人 口	521	996	66	75	1,120	770	524	5
比率(%)	1.19	2.28	0.15	0.17	2.56	1.76	1.20	0.01
カースト名	カサイ	ボデ	ミヤ	サルキ	インド人	外国人	その他	合 計
人 口	479	325	445	1,145	511	73	163	43,722
比率(%)	1.10	0.74	1.02	2.62	1.17	0.17	0.37	99.97

リット(ナチュネ:ダマイ、カミ、スナール、カサイ、ボデ、ミヤ、サルキ)が11.01%である。ポカラの「ドミナント・カースト」はバフン(22.4%)、チェットリ(20.3%)、グルン(17.6%)、ネワール(14.9%)であると言えるし、それだけで総人口の75%近くになる。従って、現在のポカラのカースト制度は、42.7%のタガダリと11.0%のアンタッチャブルとが44.4%のマトワリ・カースト群を上と下から挟み込む「グルカ系カースト制度」の特徴を持っていると言えるだろう。

現在のポカラのカースト制度は、ムルキ・アイン発布当時のものとは、つぎの四点で異なっている。第一に、タガダリとして同格であったバフン(ブラーマン)とチェットリとの間に、確かな儀礼的格差が見られる。ヒンドゥー教徒の宗教儀礼では、「パンディット(Pandit:司祭)」にはバフンしか入れないし、その儀式上の指示にチェットリは従うしかない上下関係が社会制度にも反映されたのであろう。第二に、ムルキ・アインでは差別化されていた〈奴隷にならないマトワリ〉と、〈奴隷になりうるマトワリ〉の間の儀礼的格差・差別がなくなっている。それと同様に、第三として、かつては〈水を受け取れるナチュネ〉と〈水を受け取れないナチュネ〉との間にあった儀礼的格差、差別がなくなり、一様にナチュネとして最低階層に入れられている。さらに、ムルキ・アインでは取り上げられていなかった〈ムスリム教徒のミヤ〉が、ナチュネの一つとし

てボカラでは取り扱われている。最後に第四として、現在のカースト制度は、かつては存在した法的な「権利義務」を喪失した、ただ単に「浄・不浄 (*chohko-jutho*)」の価値的残滓であると言える。

デュモン (L. Dumont, 1980) が主張したように、カースト制度の思想的底流には浄・不浄の価値がある。現在見られるバフン・チェットリの「浄・不浄価値 (*chohko-jutho*)」はヒンドゥー教での儀礼的価値として機能するだけでなく、彼らの意味世界の構成原理としても機能している。例えば、別稿で紹介したバフンのシャルマ家の敷地も、用途別に浄・不浄の価値基準から区分けされている (山本1995: 256)。また下の〈表2〉に記載したように、バフン・チェットリは主要飲食物をも浄・不浄価値により分類している (山本1995: 260-1)。高カースト者ほど不浄な飲食物の不摂取を強く義務付けられているが、その規定の遵守には大きな個人差があり、一般に女性の方が男性より厳守する傾向が強い。

1949年にインドが独立すると、ネパールの反ラナ運動が燃え上がり、ムルキ・アイン制定後ちょうど100年目の1954年にトリブバン国王が王政復古を宣言した。トリブバン国王の後継者であるマヘンドラ国王は、1959年に憲法を制定して多政党議会制民主主義への道を歩みだそうとした。そして1959年には毛沢東に率いられた中国がチベットを占拠して自治解放区を作った。毛沢東がネパール・ коммуニスト党を通じてネパールの国内政治にも干渉しだすことを恐

表2 「バフンの飲食物の浄・不浄認識」

(山本1995: 260)

品目	清浄 (チョホ)	暖 昧	不浄 (ジュト)
飲物	水、ミルク	茶	酒、コーラ、コーヒー
油類	ギー、チーズ	バター	マーガリン
肉類	——	去勢山羊、鶏肉、卵	牛肉、豚肉、水牛
穀物	米	麦	雑穀
野菜	一般的なもの	——	トマト・ガーリック・タマネギ

れ、またネルー首相率いるインドもネパール・ कांग्रेस党を通じてネパールに内政干渉する可能性があることを恐らく憂慮したであろうマヘンドラ国王は、1960年に逆クーデターを起こし誕生間もない憲法を停止した。さらに彼は、1961年に「一政党民主主義」とも言われる「パンチャヤート制度」をネパールに導入し、続いて1963年には「新民法典 (*Naya Mulki Ain*)」を制定したのである。マヘンドラ国王は、この新民法典でカースト差別の廃止をめざしたが、それは不徹底であった。「ヒンドゥー政体 (*Shashtra*)」を残してバフンとチェットリの政治的特権を認めれば、マトワリやナチュネの政治的自由を抑圧することになるとは考えなかったのである。コックス (Cox, 1989: 12) は「新民法典」を「パンチャヤート法令 (*Panchayat Constitution*)」と呼び、以下のように述べている。

「パンチャヤート憲法は、ネパールがヒンドゥー教徒の王を持たねばならないと規定している。この憲法は、さらに、伝統的なヒンドゥー的用語で、ネパール国民が四つのカテゴリー (*Varna*) と36のジャートから組織されていると規定している。またパンチャヤート憲法は、家畜の屠殺と牛肉の販売と消費を禁止しているので、ヒンドゥー教の最も聖なる教えの一つを法的に認可することになっている。最後に、ネパールの支配階級の大多数 (軍隊、大臣、国会議員の中でも最も権力ある地位に就いている人々、ならびに王族を含む) は、ネパールの最高位のヒンドゥー・カースト (つまりブラーマン、チェットリ、タクリ・チェトリ) の人々となることは明らかである。」 (Cox, 1989: 13)

マヘンドラ国王の導入したパンチャヤート体制は、(1) 三権を超越する絶対王権、(2) 政党活動の禁止、(3) 国、県、郡、市町村の各レベルでの「パンチャヤート (評議機関)」を通してネパール全土の組織的統括などであった。マヘンドラ憲法には、ネパールがヒンドゥー教を国教とすることが謳われており、その憲法精神にのっとりネパール国民に「ネパール化」運動を奨励した。「ネパール化」とは、ネパールの全て人々にヒンドゥー教に基礎付けられた同一の

ナショナル・アイデンティティを持たせる文化推進政策であり、グルカ王朝の中核はネパール語を母語とするパルバテ・ヒンドゥー（バフンとチェットリ）であるから、ネパール化政策の骨子は「ネパール語化」と「ヒンドゥー教徒化」にあった。1972年に王権を継承したビレンドラ国王もネパール化政策を続け、今やネパール国民の殆どがネパール語を話し、その80%がヒンドゥー教徒となったのは、その成果であろう。

ネパール王国が「多政党民主主義」になったのは、1990年に故ビレンドラ国王が新憲法を發布した以降である。ビレンドラ国王は、パンチャヤート体制を放棄し多政党民主主義を導入したが、「シャストラ」の本質は変えなかった。新憲法でも「ネパールがヒンドゥー教の王国」という条項は残されており、ネパールの政権中枢のポストはブラーマンとチェットリに独占される特徴は今も変わっていない。「バフン・チェットリ出身の kongress 党国会議員候補の比率は79.9%にもなり、またバフン・チェットリ出身の kommunist 党国会議員候補の比率は84.2%にもなる」(Gurung 1992: 20)。オニール (O'Neill 1994: 66-67) は、「現在の政党制度では、kongress でも kommunist でも殆どの党選出の国会議員候補はバフンとチャットリから出ているので、それ以外の低い階級のジャートは党の中央政治の意思決定システムへの参画から閉め出されている」と断言している。一番象徴的なのは、ネパールの首相人事であろう。多政党民主主義憲法下では、国民の国会選挙で与党となった政党総裁は、出身カーストの如何に関わらず首相となれるが、実際には、首相となる人は、バフンかチャットリに限定されている。次頁の〈表3〉は、1990年以降から現在に至るまでの首相就任者の一覧表であるが、そのなかには一人のマトワリもいない。

以上述べたように、ネパールでは、ムルキ・アイン以来のカースト制度の残滓の中で「ダリット」は最も古い、最も搾取され続けた「社会的弱者」であり、それと同時に、シャストラ体制の政治的土壌では、マトワリ・カースト諸族もタガダリの政治的優位性に支配された「社会的弱者」だったことを明記しておきたい。かつてのグルカ王朝軍の主力はマトワリ兵士であった。現在のネパー

表3 「民主化以降のネパール首相一覧」

首 相 氏 名	在 任 期 間	出身カースト	政党* ¹	回数
クリシュナ・プラサード・バットライ	1990年4月～1991年5月	バフン	NC	1
ギリジャ・プラサード・コイララ	1991年5月～1994年11月	バフン	NC	1
マン・モハン・アディカリ	1994年11月～1995年8月	バフン	UML	1
シェル・バハドール・デウワ	1995年9月～1997年2月	チェットリ	NC	1
ロケンドラ・B・チャンダ	1997年3月～1997年8月	チェットリ	RPP	1
スルヤ・バハドール・タパ	1997年8月～1998年3月	チェットリ	RPP	2
ギリジャ・プラサード・コイララ	1998年3月～1999年5月	バフン	NC	2
クリシュナ・プラサード・バットライ	1999年5月～2000年2月	バフン	NC	2
ギリジャ・プラサード・コイララ	2000年2月～2001年7月	バフン	NC	3
シェル・バハドール・デウワ	2001年7月～2002年11月	チェットリ	NC-D	2
(ロケンドラ・B・チャンダ)* ²	2002年11月～2003年5月	チェットリ	RPP	2
(スルヤ・バハドール・タパ)	2003年6月～2004年5月	チェットリ	RPP	3
(シェル・バハドール・デウワ)	2004年5月～2005年1月	チェットリ	NC-D	3
国王親政(ツルシ・ギリ)	2005年2月～2007年2月	ギリ	?	1
ギリジャ・プラサード・コイララ	2007年3月～ 現在	バフン	NC	4

*1：政党略記号：NC（ネパール・ kongress 党）、UML（統一マルクス・レーニスト党：共産党）、RPP（ラストリヤ・プラジャタナトラ：国民民主党）、NC-D（ネパール・kongress デモクラティック）

*2：（ ）内の首相は、国王が強権発動し議会手続きを無視して直接指名している。

ル国軍の主力もそうである。そして、1996年2月から始まったマオイストの「人民戦争」に参加したゲリラ部隊の主力も、山岳地帯にすむ貧しいマトワリ・カースト群から構成されている。マトワリとは、歴代、バフンとチェットリに仕える社会的弱者なのである。それだけに永年のシャストラ体制に支えられきたグルカ王朝が廃絶され共和国になりそうなネパールは、今大きく変わろうとしている。

Ⅲ ポカラの自然環境と観光産業の発達：

ポカラ市は、ネパールの首都カトマンドゥーから西方200キロにある中西部最大の主要都市である。この都市が現在ネパールでも首都カトマンドゥーに次ぐ第二の観光都市として発展してきたのには、三つの要因がある。第一には、ポカラの町のどこからも仰ぎ見ることの出来る8000メートル級のヒマラヤの銘峰がもたらすパノラマの絶景である。上の〈表4〉にポカラから仰ぎ見ることの出来るヒマラヤ連峰を列举しておきたい。

毎日、朝夕に天然の役者達が演じてくれるヒマラヤ頂上の冠雪斜面に映える朝焼けと夕焼けのページェントは、「神々の座」の呼び名に相応しい。これこそは訪れた者にしか分らない自然の感動としか言いようがない。ポカラに建てられた家々には必ず窓が北側と南側にあり、北側の窓からはヒマラヤの遠景が、南側の窓からは陽光が楽しめ、かつ双方の窓を絶えず自然の風が吹き抜けるのである。このヒマラヤ連峰こそがポカラの唯一無二の観光資源であることは言うまでもない。世界の屋根ヒマラヤが近くに見えるので、ポカラは高地で寒冷地であるような印象を持たれるようであるが、ポカラの平均海拔は約900メートルで、冬でも最低気温が零下にはなるかならないかで、陽光の射す日中ならすぐに10度近くの陽気が戻ってくる。夏も湿潤なモンスーン故に、めったに35度以上の日照りにはならない。この高地亜熱帯性気候は、いわばハワイとは一味違った「常春」の気候と言っていいだろう。だから、雨季の雲海がヒマラヤを覆う4月から8月までの5ヶ月間を除くと、青空にそよ風が吹き、花々が咲き乱れ、小鳥たちが野原や蒼い湖上を飛びかう浄土なのである。

表4 ポカラ市内から遠望できるヒマラヤ連峰

1. ダウラギリ (8,167m)	5. アナプルナⅠ峰 (8,078m)
2. マチャプチャレ (6,997m)	6. アナプルナⅡ峰 (7,273m)
3. マナスル (8,125m)	7. アナプルナⅢ峰 (7,577m)
4. ヒマールチュリ (7,893m)	8. アナプルナⅣ峰 (7,524m)

ボカラが観光地として発達した理由の二つめは、ボカラがネパール中西部の交通の要所であることにある。そもそもボカラは、インドとチベットとを結ぶ交易路「塩の道」のロバ隊商の中継地として発達してきた。明治末期に日本人として初めてネパールに密かに入国しチベットへ潜入した河口慧海は、『チベット旅行記』の中で、ドーラギリ麓のタコーラへ登攀する直前にボカラに一週間ほど滞在してテントなどの必要物資を整えたことを記録し、このセティ川沿いの美しい街ボカラを愛でている。

海拔900メートルしかない比較的低いボカラ盆地は、長い間風土病のマラリアが蔓延していた。しかし、インド低地出身の地中海系人種であるバフン・チェットリ達は、マラリアに対する遺伝的抗体を保有しており、それ故ボカラへの最初の植民となりえたし、そのお陰で広い肥沃な農地を占有することが出来た。それに比べると、マラリア蚊の生息しない高地ヒマラヤの原住民であるモンゴロイド系諸族（酒を飲む習慣があるので「マトワリ（飲酒カースト）」と総称された）は、1960年代になって世界保健機構（WHO）がボカラ盆地のマラリア駆逐の宣言をした後にボカラ盆地に降りてきた。その頃には既にボカラ盆地の肥沃な農地は殆どバフン・チェットリに確保されてしまっており、後発の入植民マトワリは農業以外の生業、つまり何らかの商業、サービス業で生きるしか術がなかった。ちょうど1970年代半ばから本格化したボカラの観光産業は、これらのマトワリたちに格好の仕事を提供することになったのである。

1950年に開国したネパールは、その二年後1952年にボカラにも空港を建設した。それによりボカラは首都カトマンドゥやインドの大都市と空から結ばれることとなり、国際観光市場の一角に組み込まれたのである。土地の古老の話では、1960年代半ばには、フェワताल周辺は世界各地のヒッピー達がよく集まったという。1960年代と言えば、世界でマストワーが始まる頃で、ヒッピー達は東洋の神秘を探究する先駆けであったのだろう。美しいヒマラヤの遠景、牧歌的な町並み、ヒマラヤを写す満々と水を湛えたフェワताल湖、野生のガンジャ（大麻）の群れは、現代の「シャングリラ」として世界のヒッピーのクチコミで

世界中にポカラの名前を知らしめたのであろう。1969年になると、インドの経済援助でシッダルト幹線道路がポカラ―バイラワ間に開通した。さらに1973年には、中国の援助でカトマンドゥーポカラ間を結ぶブリティビ幹線道路が開通した。これら二本の高速道路の開通により、世界のマスツアー・ブームに乗った安価なバス（航空賃の十分の一以下）を利用したバックパックの若者達が世界各地からポカラを目指すようになったのである。これが、ポカラの観光都市化の始まりである。現在、カトマンドゥーからポカラまで飛行機で半時間、バスでは数時間である。この比較的交通の便がよいことが、首都カトマンドゥーでは味わえないヒマラヤのパノラマを眺めたい世界の観光客達が首都から少し足を伸ばしてポカラを訪れる何よりの理由なのである。

ポカラが観光地として賑わう三番目の理由は、文化的に多様な20を越す「エスニック集団（*Jat*）」が共棲していることであろう。夫々のジャートは独自の人種の差異と自前の文化的特徴を持っており観光客を楽しませてくれるし、季節の折々に多彩な民族的祝祭を演じてポカラの観光客や住民を楽しませてくれるのである。次頁の〈表5〉に示したように、主要なジャートには「カースト・ニックネーム」や「カースト・ジョーク」に表象される集団的個性があつて、市場や盛り場などで日々の興味深いエスニック・ドラマを演じてくれている。粗末で安価なゲスト・ハウスに比較的長期の休暇滞在をする欧米人観光客の中には、簡単なネパール語会話を短期で習得して、ポカラの現住民と直の交流を楽しむことの好きな人々が多い。しかし、高価なホテルで短期滞在しかない日本人観光客には、ポカラのマルチ・エスニック社会の醍醐味がなかなか分らないように思われるのは残念としか言いようがない。

ポカラの現住民は、ある人の家族姓を聞けば何カーストに属するかが分かるし、家族姓からは判定不能でも、その人と会って二、三分も会話すれば、何ジャートの人間かを極めて正確に判明できる。ポカラに共棲する主要なカーストには、その特徴を誇張したステレオ・タイプなイメージが貼り付けられており、それが「カースト・ニックネーム（*Jatiya Uppaname*）」や「カースト・

表5 「ボカラのカースト別渾名一覧」

(ヴァルナ) カースト名	カースト渾名
(タガダリ1) バフン	尊称 バンディット (ヒンドゥー司祭) 蔑称 タパレ (欲深)
(タガダリ2) チェットリ	尊称 カジサーブ (署長) 蔑称 カシア (混血者)
(マトワリ) グルン	尊称 ムキヤ (村長)、キャブテン (大将) 蔑称 ジャディヤ (飲み助)、ベデ (羊)
(マトワリ) ネワール	尊称 サウジ (店の旦那) 蔑称 コーディ (稗飯喰い)、ククラ (臆病者)
(マトワリ) タカリ	尊称 スッパ・サーブ (長者)、ラマ (僧侶) 蔑称 ボテ (チベット難民)
(マトワリ) マガール ギリ ガルティ	蔑称 リド (尻尾のない家畜) 蔑称 マガンテ (乞食) 蔑称 ドレ (駕籠かき雲助)
(ダリット) ダマイ カミ サルキ ミヤ	尊称 ダルジ (マスター)、蔑称 ダム (お囃子) 蔑称 ダム (囃子屋) 蔑称 チャマレ (牛の尻尾) 蔑称 チュラテ (包茎男)

ジョーク」を作り出している。筆者は、そのようなカースト・ジョークを多々採集しており、その一部はすでに別稿（山本1991）で披露している。次頁に、〈表5〉としてカースト・ニックネームをまとめておきたい。

この〈表5〉のカースト・ニックネームについては若干の説明が必要であろう。まずバフン（ブラーマン）の尊称である「バンディット」はヒンドゥー教の儀式を司る「欄宜」を指しており、ベーダの知識豊かなバフンの成人男子はバンディットになる資格がある。チェットリの家でヒンドゥー教の儀式をする際には、バンディットを招く必要がある。それ故、ベーダの知識が殆んどない一般のバフンにも調子よく「バンディット」と呼びかける際に使用するのである。また、バンディットとして招かれた際には、儀式の後で祝宴を開き、パ

ンディットに供物を供ししなければならない。この際に、祝宴の料理は、バナナの葉で編んだ宴会用の大皿「タバリ (Tapari)」に盛る必要がある。普段は貧困な生活をしているバフン、あるいは欲の深いバフンは、パンディットとして招かれると贈り物をタバリごと貰って帰るという姿を揶揄されて、「タバレ (Tapare)」(タバリまで持ち帰る人) という蔑称がバフンに使われるようになったと言われている。

チェットリは、かつて軍隊の指揮官であったり、役所のお役人であった人々の末裔が多い。役所の偉いさんには「カジ・サーブ」(所長さん) の呼びかけが一般的に使用されており、それがチェットリに対する尊称(おべんちゃら)にも使われている。また、「カス (Kas)」とはネパールがヒンドゥー化される以前からパルバディに住んでいた原住民で、彼らはコーカサス人種ではなくてモンゴロイド系であったというネパールの学者もいる。「カシア (Kasia)」とは「カスの血を引く者」という意味で、コーカサス人種でサンスクリット文化の正統な後継者であるバフンが、同じタガダリを名乗る紛い者を揶揄する意味を含んだチェットリへの蔑称となったのである。

グルンは、ボカラ周辺の山村出身者あるいはその子孫であり、村の「村長」(ムキヤ) は彼らの尊称として相応しい。またボカラ在住のグルンの多くは、グルカ兵として外国で傭兵として出稼ぎをしてきた人々が多く、それだけに軍隊用語の「キャプテン (大尉)」あるいは「ルテナー (中尉)」から、「キャプテン・サーブ」とか「ルテナー・サーブ」という呼び方が元グルカ兵に対する尊称となる。彼らの蔑称の「ジャディヤ」(酔っ払い、アル中) は、軍隊時代に覚えた飲酒習慣をボカラに持ち帰り大酒飲みをする姿が、禁酒を尊ぶ上位カーストのバフンの目には異様に映ったのであろう。また、「ベデ」(羊) の蔑称は、羊のように同一の集団行動に走りがちなグルンの性格を言িয়েて妙である。

ボカラのネワールは、殆どが何らかの形で商業に従事している。だから、彼らの「サウジ」(商店主への呼びかけ) は、とりわけ尊称と言うようなものではない。しかし、「コーデ」(稗喰い) は確かに蔑称である。貧しいネワール達は

家では米が食べられずに「稗」(コード)を食べていても、外では米飯を食べているように吹聴する性向があると言われており、そのような「見栄を張る性向」が嘲笑されて、「コード」の蔑称が与えられたのである。また、ネワールは市街地の地代の高さも影響するのであろうが、互いに密着して家を建てる傾向がある。この状態は、田畑を抱いて孤立する傾向のあるバフンやチェットリから見れば、ネワールは怖がりやで、臆病だから密集して住むのだと言われており、最も臆病な家畜である「鶏(ククラ)」が彼らの蔑称として当てられたのである。

タカリは、かつて「塩の道」の主役であり、繁栄した名門家族は「スッパ」と呼ばれ尊敬されていた。それ故、スッパ家系外のタカリには、それが尊称になることは言うまでもない。またタカリには「ボテ」(チベット難民)という蔑称も使われるが、タカリとチベット人とは文化的にも形質的にも似ており、両者の差異をあえて見つけるなら、一般的にタカリはボテよりも経済的にリッチである。またタカリにもボテにも尊称として「ラマ(仏教僧)」が使われることもある。

その他にも、低いカーストに行くほどに、尊称はなく、蔑称のみが目立っている。マガールに関しては、「リド」(尻尾のない家畜)という蔑称があるが、尻尾のない家畜は家畜としては欠陥品であり、したがって、田舎もので頭の回転が悪いと評されるマガールを「尻尾のない存在」として揶揄した蔑称なのであろう。ギリはカースト制度から離脱して宗教三昧に耽ったサネヤシの子孫と言われている。サネヤシは人々の間を歩きまわり托鉢するが、それが蔑称の「マガンテ」(乞食)になったのである。ガルティは封建時代には奴隷階級であったから、「ドレ」(駕籠かき、雲助)という蔑称が付けられている。

ダリット(アンタッチャブル)の諸カーストにも蔑称が軒並みである。ダマイ(洋服屋)やカミ(鍛冶屋)は伝統的に婚礼行列の楽団を担当するので、ドンチャカと鳴る音を振った「ダム」という蔑称が当てられている。サルキ(皮細工師)は牛の死体を処理するので、「チャマレ」(牛の尻尾)の蔑称がある。

ムスレム（イスラム教徒）であるミヤは、幼児期に「割礼」（包茎処理）をする習慣があるので「チュラテ」（包茎男）という蔑称で呼ばれるのである。ダリットの中で唯一の尊称を持つのはダマイだけで、ボカラの都市化に刺戟されて洋裁師のダマイは商売繁盛をするものが少なくない。それで早く、安く服装を作ってもらいたい他カーストのお得意さんからおべっかなな尊称「ダルジ」（マスター）が付いてしまったのであろう。これらのニック・ネームは、そのカーストが大体どの程度の社会的prestigeを認められているかを判断するのに有効であろう。

これらニックネームの存在は、ボカラが種々多様なジャート群が住んでいるマルチ・エスニックな街であることを物語っている。このようなエスニック集団の夫々が特有の文化的特性、独特のエスニック的性格を持っている。そのような人々が織り成す人生ドラマを見聞きすることは、長期で滞在する観光客の無聊をなぐさめてくれることになる。多くのエスニック衣装、エスニック祭りが、せっかく訪れた短期滞在の観光客の目に触れることがないので、現在、ボカラのホテルでは、観光客を集めて歌とダンスに英語での解説をつけてマルチ・エスニック・ショーを実施しているところが多い。

Ⅳ ポカラ住民のカースト別職業構造の特徴

「ボカラ・センサス・データベース」は、先述した筆者の「ボカラ全戸調査」（1982年12月から1983年2月実施）の全調査結果をコンピュータに入力したものである（山本・北村1989、1990）。本稿の巻末に掲載した「ボカラのカースト別職業構造(1)～(3)：(実数)」（〈表15-1〉から〈表15-3〉）ならびに「ボカラのカースト別職業構造(1)～(3)：(%)」（〈表16-1〉から〈表16-3〉）は、本稿のための基礎表群として、このデータベースから取り出したものである。ここでは、調査時における「職業項目」のデータ収集方法や「職業カテゴリー」の分類法に関して、若干の説明しておく必要があるだろう。

各世帯について家族構成を聞き取りする上で、同時に各メンバーの年齢、ならびに6歳以上の家族構成員については、その職業を個別に聞き出している。ボカラでは「6歳以上」なら立派な就業年齢にあり、小学校以上の学校に通うなら「学生」、家で家業を手伝うなら「家内労働」、何もないなら「無職」へと分類している。実際に調査してみて、年齢の厳密な把握に困難があった。年齢別の人口ピラミッドを描くと、10歳代、5歳代の人口が突出している。人々の年齢の記憶は5歳単位を基本として覚えやすいからであろう。また、職業の聞き取り調査で困難なのは、人々の「専業」という社会意識が余り徹底していない社会なので、一人の人間がいくつもの職業に同時に就き、または時間ごと、日替わり、シーズン毎に交替・変化することが頻繁に見られる。例えば、早朝から午前中に大学で学生として講義を受け、午後は役所あるいは会社で仕事をする若者は極めて多い。そのような場合、我々の調査チームの処理時間と能力の限界で、本人にとって最も重要なもの一つだけ挙げてもらい、一人あたり一つの職業しか取り上げられなかったのは残念であった。

職業カテゴリーは以下の19種類がある。①「農業 (AG)」は自分の田畑による自営農民。②「経営者 (BI)」は、家内労働でない複数の他人を雇用した会社登録の経営者（但し、観光産業関係は除外している）。③「家内労働 (HW)」は、主に専業主婦、未婚女性の家内労働者、就学してない児童若干。④「賃金労働 (LA)」は、時給・日給制の肉体（非熟練）賃金労働者（ただし、給料制ではない）。⑤「恩給生活 (PE)」は、「ブブ・ラフレ（元グルカ兵）」など元長期外国出稼ぎ労働者の年金生活者（彼らの中にはボカラに戻った後に年金を貰いながらビジネスをしている者もいるが、ここでは恩給のみに依存する生活者に制限）。⑥「俸給生活 (SE)」は、一般サラリーマン（ただし、家内労働者、それに⑩から⑮までの就業者も除外している）。⑦「児童・学生 (ST)」は、小学生から大学生まで。⑧「公務員 (GOV)」は、ネパール政府・地方役所の公務員。⑨「外国機関 (FOR)」は、グルカ兵、門番、スポーツ・コーチ、肉体労働などで外国へ出稼ぎに行っている人々、あるいは在ネパールの外国機関・NGO団体

の勤務者。⑩「医療関係 (MDC)」は、病院・診療所など医療関連就業者。⑪「法律金融 (ECN)」は、法律事務所(「ラカンダース」と呼ばれる代書屋も含む)や銀行・外国紙幣交換所の就業者。⑫「製造業 (MNF)」は、家具、製紙、製麺・製パン工場、羊毛工場などの従業員。⑬「一般商店 (COM)」は、「ジェネラル・ショップ」と呼ばれる「何でも屋」から食品店、本屋、雑貨小間物商、「ファンシー・ショップ」(輸入品高級雑貨店)、床屋・美容師などのサービス業、露天販売業者をも含む一般商店業者(ただし、土産物販売店は除外し観光産業に分類)。⑭「学校教育 (EDC)」は、幼稚園、英語学校を含む学校関係者一般。⑮「観光産業 (TOR)」は、ホテル・ロジ・ゲストハウス、レストラン、ティーショップや、竹細工店(籠屋)、チベット絨毯店、「タンカ(曼荼羅)」など土産物販売業者。⑯「自由業 (FRE)」は、「ポリティッシャン」と呼ばれる政党関連者、公的・私的土建事業の「コントラクター」と呼ばれる発注所と作業現場との仲介業者、インド同様ネパールでも「マグネ・マンチェ(乞食)」は立派な自由業であると言えよう。⑰「その他 (OTH)」は、職業内容が曖昧でカテゴリー分類が困難なもの。⑱「無職 (XX)」は失業者・無職者。⑲「不明 (UN)」は、調査不能・欠損データなどとなる。

ポカラの「カースト別職業構造」の全体的特徴を大きく掌握すると、以下の三つの特徴があるように思える。筆者は、かつてポカラを「明るい貧困」の都市として紹介したことがある(山本1998)。ポカラの「明るさ」には、美しいヒマラヤの自然と「牧歌的な景観」が必須の構成要素となる。このポカラの牧歌的なのかさは、ポカラの市街地の道路から少し奥まったところに入ったり、中心地を外れた周辺に出るとまだ広い草地が残っていて、ほっとするところから生まれている。ポカラの全労働者人口の18%強が自営農業者であることは、この牧歌性を残すことの裏付けとなるであろう。だから、ポカラにはニューヨークや東京などの「コンクリート・ジャングル」の冷たさはない。ヒマラヤの自然美とともに、多分、このポカラの牧歌性が先進諸国の若者を引き付けるのだろう。第二に、ポカラの6歳以上の全労働可能人口で、最多比率を誇るカテゴ

リーは⑦「学生」であって3割弱となる。ボカラの朝は子供達の通学姿が町中に溢れるが、子供に満足な学校教育を受けさせるためにボカラに移住してくる両親は多い。したがって、ボカラは単に観光都市であるだけでなく、大学から高校、中学、小学校、幼稚園、保育所まで揃った「教育都市」という顔も持っている。この学生人口が相対的に多いという町の特徴は、ボカラに活気を生み出して、明るさの要素を生み出すことにも繋がっているのだろう。第三に、ボカラが観光都市に相応しい20近くのジャート群が共棲するマルチ・エスニックな町であることはすでに触れたが、それと同時に多くの外国人が存在する極めて「コスモポリタン」な町でもある。我々の調査では、インド人511人、パキスタン人16人、日本人11人、英国人10人、ドイツ人6人、オランダ人4人、スイス人4人、ニュージーランド人4人、米国人4人、フランス人2人、オーストラリア人2人、フィリピン人2人、その他の外国人6人と総計582人がボカラに住んでいる（彼らは何らかの仕事でボカラに来ており、調査時を挟んで前後6ヶ月間ボカラに滞在する、あるいは滞在予定の居住者であって、単なるホテル住まいの観光客ではない）。したがって、この外国人居住者の総数に、ホテル住まいの国際的観光客を含めたら、恐らく、この数倍近くの外国人が我々の調査時にボカラにいたことであろう。この外国人の多さが、ボカラに独特のコスモポリタンな雰囲気醸し出しており、とりわけそれがフェワताल湖岸地域のエキゾチックな雰囲気を醸成してくれている。外国人の中でもインド人が飛び切り多いのは、インド・ネパール国境は「オープン・ボーダー」で、双方の国民は相手国に入国するのにヴィザの発行を必要としない。このオープン・ボーダーの問題は、両国の犯罪者や密貿易の取締まりの観点から以前にも問題視されており、最近ではマオイストのゲリラ軍が定期的にオープンボーダーを往来しているとの苦情が山積しているが、近い将来に解決する見込みはまったくない。

ボカラの観光都市化は、1959年にチベットが中国の解放自治区になって、チベット難民とタカリ族がボカラに降りてきたこと、世界のマスツーリズムの動

きを先回りした WHO が1960年代にポカラのマラリアを撲滅させたこと、それ以降から周辺山岳地域に居住していたマトワリ達がポカラへ移住してきたこと、1970年代に入ってポカラへの高速道路が二本も開通したことなどの諸現象がほぼ同時に連続して重なりあうように発生し、それらの相乗効果として、1970年代後半ぐらいから本格化しだしたのである。その結果、人口増加が起こり、土地価格が上昇して、それまでは基本的に自給自足経済社会であったポカラが急激な貨幣市場化を迎えるようになる。そのような市場経済化の大変化に、上手に適応した者は富裕化し、逆に乗り損なったものは一層貧困化して、経済階級の両極分解が起こり出した。その流れの中で、適切に観光産業の上昇運に乗って成功したのが後発入殖民のマトワリ・カースト群であり、その中でも、最も活躍したのがヒマラヤの商業民族タカリであろう。ポカラの観光化を逆手にとった成功者と言っても間違いはない。

〈タカリの場合〉

インドとチベットの間の「塩の道」交易を独占していたタカリ族は、1959年に中華人民共和国がチベットを自治解放区とし国境を封鎖してしまうと、それまでの交易継続の志を断念して根拠地タコールを放棄し低地に降りてくるようになった。そこでタカリ族は、それ以前の商業民として交易活動で蓄積した資本、商業手形のネット網を利用して、バイラワ、ポカラ、カトマンドゥなどを根拠地にして新しい商売のネットワークを作り出したのである。ポカラでは、一方でオールドバザールで雑貨商などを開いたり、他方ではそれ以前に塩街道沿いに「バッティ (*bhatti*)」を営業した経験などを下敷に、若干の資金を持つものは、フェワ・タール周辺で小さいホテルやレストランを営業しはじめて、現在のポカラ観光産業の基盤を作るようになった。ちょうどこの頃は、米国や欧州からヒッピーなどのバックパック・ツアーの先駆者たちがフェワタール周辺で集まりだす頃でもあった。

タカリのホテル・ビジネスのための立ち上げの資金の調達には、タカリ特有の金融的互助制度「ディクール (*dikhur*)」が若いタカリ達の資金調達を助け

ている（飯島1982：93-95）。ディクールは最初はタカリ内部の「種耨」の貸し借りの制度であったが、これがタカリの商業民としての成長の過程で、資金調達の講のような制度に変化したと言われている。このディクールの制度は、ボカラのビジネス化の流れの中で、タカリ以外のジャート群にも広がり、マルチ・エスニック組織に変化していった。その変化と同時に、親しい間柄の人情味溢れる資金保護の組織から、投機的性格の強い利潤追求の組織に変化していった。1990年に筆者はボカラのチプレドゥングのマダブ・ゴータム氏が主催するディクールの入札会を観察させてもらったが、マルチ・カースト性と投機性を印象付けるものであった。その当時、ボカラでは90を越えるディクールが存在し、中には会員の金の持ち逃げ、あるいは返金不能のため、焦げ付いたり解散したディクールが3つほど出てきていた。銀行の手続きが煩雑で時間がかかる不便さが嫌いで、即刻に資金を確保する手段としてディクールは手頃ではあるが、少しブラック・ビジネスに染まりだしたような印象もある。

筆者の昵懇のタカリのホテル業者もカトマンドゥとボカラで展開されている10以上の異なるディクールに入っており、それで企業の資金の遣り繰りをしている。1998年の8月だったが、彼は、ボカラから自分のホテル専属の運転手をカトマンドゥに呼びだして、カトマンドゥからボカラまで黒塗りの「ベンツ」を運転させた。そのベンツは、彼のディクールの仲間の一人が破産したために、その資金返済の現物差し押え品（確か20ラック NRs.、即ち300万円相当分の物件）としてボカラの自分のホテルに引き取った「ボカラにただ一台ある由緒ある」ベンツであった。実際、筆者もボカラ空港から彼のホテルまで、高々5分程度の道のりを、ホテルの運転手がこのベンツで迎えに来てくれて乗せてもらったことがある。この時が筆者にとり初めてのベンツ試乗であったが、とても結構な乗り心地であった。しかし、後日、このベンツはホテルにとっては頭痛の種になる。第一に、物凄く燃費が悪い。ガソリン代の高いネパールでは深刻である。第二に、本来アウトバーンのような高速道路を走るように設計されているから、車底が低い。アスファルト化率が低く、穴ぼこだらけのボカラの

道路事情では始終底を削りながら走行しなければならない。第三に、そんな事情だから、このベンツはそのホテルの前庭の「走れる置物」（可哀想に運転手は毎朝一度はエンジンをふかしていた）になってしまった。第四に、ポカラに一台きりの稀少なベンツだから誰かに買ってもらいたがってホテルのものが色々努力したが、何せ先述の第一と第二の欠陥が知れ渡り、しかも20ラック・ネパール・ルピーという高価な買い物である。何年かはホテルの庭の飾り物となっていた。しかし、2006年の夏に筆者が同ホテルを再訪すると、そのベンツは前庭から居なくなっていた。ホテルでパーティーや研修会などを開いて客の車がたくさん駐車されると、そのベンツがいよいよ邪魔になったのであろう。誰かが買ってくれたとは、一度も聞いたことがない。そっと処分されたのに違いあるまい。

タカリ族にとって観光産業参入への集中は、それなりのジャート内の相互互助の効果が働いただろうし、ポカラのホテル協会の会長はタカリで占められている。これはポカラにおいて、若干の資金的貯蓄を持っていたタカリが少数民族集団としての特性を最大限に利用したからと考えられる。1970年代早々には、ポカラの中心地区で最大の繁華街でもあるマヘンドラプールの近くのナディプールに「タカリ・サマージ」（タカリ協会）の土地と建物を確保し、タカリの人々の婚礼と葬式を行うだけでなく、毎年ダサインのお祭りには、そこにポカラ在住のタカリ家族全員が集合し、長老から「ティカ（祝粉）」を貰って皆で会食しお祝いすることを常としている。さらに既に15年ほど前になるが、ポカラ市の南郊外のプルバリに、第二の「タカリ・サマージュ・ガレ」（タカリ協会の家）を建設して、タカリ族の一層の結束を強化している。筆者に言わせれば、このタカリ・サマージュは、ポカラのホテル協会の理事会を拡大したものと重複するところがあり、ポカラのホテル・レストラン業種の同業組合的な組織でもある。あたかも西欧中世の「ギルド」と同様の役割があるように思える。そして、この組織があったからこそ、タカリのホテル業者は内部の利益対立を調整して、同業者の利権を守り、それをタカリ族の経済的地位の向上に役立てた

表6 ポカラ全体と比較したタカリの職業構造(%)

職業カテゴリー	(a)ジャート内人口比	(b)ポカラ人口平均比	比率差分(=a-b)
①自営農業者	4.58	18.5	- 13.9
②経営者	0.69	0.21	+ 0.48
③家内労働者	18.1	18.6	- 0.5
④賃金労働者	0.92	3.56	- 2.64
⑤恩給生活者	0	0.03	- 0.03
⑥サラリーマン	0.57	0.82	- 0.25
⑦児童学生	35.2	29.6	+ 5.6
⑧公務員	0.81	2.10	- 1.29
⑨外国機関	2.17	3.07	- 0.9
⑩医療関連	1.03	0.75	+ 0.28
⑪法律金融	0.23	0.65	- 0.42
⑫製造業者	0.80	1.18	- 0.38
⑬一般商店	8.12	6.30	+ 1.82
⑭学校教育	1.03	0.77	+ 0.26
⑮観光産業	19.0	3.98	+ 15.02
⑯自由業	2.52	1.92	+ 0.6
⑰その他(+⑱、⑲)	4.12	7.94	- 3.82

のであろう。

2003年夏には「アナプーナ・アーチェリー・クラブ」の創立を祝って、「カトマンドゥ・アーチェリー・クラブ」とが、このナディプールにあるタカリ・サマージュの屋敷内で合同のアーチェリー記念大会を開催した。これらのアーチェラーは、タカリ、マガール、グルンの連合体であると同時に、そのメンバーにはネパールの警察・軍隊・役人の退役者が多いのが特色であった。言わば、マトワリの「ベテラン連合会」の色彩も見えてくる。

ジャート内結合と相互扶助を最大化することで、少数民族集団ながらジャー

ト内ビジネス・ネットワークの情報交換や相互扶助を強めたタカリは、ポカラでのいずれのドミナントなジャート群（バフン、チェトリ、グルン、ネワール）にも見られない自己ジャート内の経済階級の乖離を防せごうとする努力を試みたことが、タカリの成功の重要なポイントであろう。

ポカラ全体の職業構造と比較したタカリの示差的特徴は先の〈表6〉に見られるが、観光産業への就業者比率が突出して大きいことである。そして逆に、自営農業者の比率が極めて低いことである。これらは、農本主義を捨ててポカラの「観光産業」に集中した商民タカリの特徴であると言えるだろう。そして、タカリ族が接着剂的な機能を果たして、他のマトワリ・カースト群、グルン、マガール、ボテなどを観光産業関連に呼び込んだことも重要である。タカリのホテルは、空港やバスターミナルに、これらマトワリ・カーストのタクシー・ドライバーを配置して、自分のホテルに客引きして連れてきたものには「マージン」を支払う制度を、ポカラでは一番最初に実行しだしたのである。

〈バフン・チェットリの場合〉

タカリ以外のジャートは、後述するミヤ（ムスリム）やカサイを除いて、ポカラの都市化による変革に対して、ジャート内が結束し一致団結して助け合おうとする事実が見られない。第一に、そうするためにはジャート人口が大きすぎて、統合するには、相当な強権が必要であるが、自然発生的なジャートという社会集団にはそのような権力装置は適切ではない。ポカラへの最初の入植民であるバフン、それに続いたチェットリは、この盆地の肥沃な土地を占有してきた。彼らは基本的に農本主義で、土地に執着し自給自足農業に従事してきた。もちろん、彼らの間には古くから大土地所有者と小土地所有者との相違はあったが、まだ土地が商品化されなかった頃には、両者間の貧富差は潜在的にあったが顕在化しなかった。同じタガダリとして生活様式は均質で質素で、酒肉も摂らない粗末なものであった。

タガダリ、とりわけバフンは、「ジュト（汚れ）」を避ける性向が強い。酒を飲まず、肉食しないのも、ジュトを忌み嫌うからである。またバフンの男たち

が産児制限の「パイプカット」を嫌がるのも自分の身体に人工的な傷が付くことで「ジウト」にされることが受け入れられないからである。バフンの成人男性には、家族の宗教的行事を司る義務があり、ジウトになれば、それが出来なくなる。それでは、未成年者と同じになる。それにタガダリ達は、「父系血統」を尊重し、その継承に固執する。家系の系統図を書いてもらっても、父系は辿れるが、その系統図に母や妻の存在はあまり出てこない。ポカラのヒンドゥー教徒は、息子に葬式を出して貰わないと死後に天国に行けないと信じている。だから息子を作ることに強いこだわりがあり、娘が何人か出来ても、まだ息子が生まれるまで子供を作ろうとする。男児の幼児死亡率は一般に女児よりも高いから、一人息子では不安で、二人、三人と息子を産み増やそうとすれば、娘たちも何人か生まれて、結局は子沢山の大家族になりがちである。産児制限の嫌いな夫と、夫に逆らうことのない妻達は、多産奨励と男子均分相続を数世代繰り返すうちに、最初は潤沢にあった彼ら一族の農地は段々と細分化されてしまうのである。そして、彼ら中位レベルの一家族あたりが、その家族全員が一年間に消費する農産物必要量の生産にぎりぎりの「限界状況」(売却可能な余剰生産物が無い状況)に陥った頃、1970年代以降の都市化・貨幣市場化が来襲してきたのである。

このうねりで消費水準の上昇欲に駆られた彼らは、現金収入の道を農業以外に求め始めたのである。1970年代以降においても、まだ大土地所有家族なら、小作に労働させて作らせた農産物の余剰分を賣った収益を教育資金として子弟に高等教育を授け、その子弟を官僚や専門職に仕上げることによって子孫の一層の社会的上昇の弾みを付けることが出来よう。たが、その様な余剰の土地を保有しなかった家族は、その小役人の給料だけでは家族全部が生活するには足らないので、妻達による自宅近辺の田畑の耕作を欠かせない。農本主義の伝統から商売のノウハウを知らない彼らは、商品化しだした農地を処分して資金を作り、商売に賣って出るだけの度量と才覚がなかったのである。そのなかでも、最も厳しい選択を迫られたのは、小役人の現金収入さえ期待出来ないバフン・

表7 「ポカラの土地売買による所有権移動(バフン・チェトリからマトワリ諸族へ)」

カースト	バフン	チェトリ	グルン	ネワール	タカリ	マガール	タマン	ダマイ	その他	合計
土地積	-650	-935	+1300	+20	+76	+80	-23	-68	+169	0

チェトリ達であろう。現金収入の道を求めて右往左往しながら、いつしか借金地獄に陥り、やがて父祖伝来の田畑を切り売り、益々困窮化の道に転落してしまい、あげくの果ては、自らの田畑をすっかり処分して、まだ土地価格がポカラの十分の一程度のタライ地方に転出する者が少なからず出てきている。

著者がポカラの土地税務所で集めた土地登録名義の変更記録（1978年7月から1982年6月までの4年分）の集計結果からカースト間の土地所有移動を下の表に明記しておきたい（山本、1986: 103）。

上記の表で、“+” 数値は、この4年間の獲得土地面積（単位ロパニ）を、“-” 数値は喪失土地面積（単位ロパニ）を表している。これだけのデータだけで一般化することは難しいが、ポカラにおける所有土地面積のカースト間移動の一端が推定されよう。主に上位カーストのバフン・チェトリ、そしてナチュネが土地所有面積を著しく減じており、それらの土地所有がマトワリ・カースト群の主にグルン、マガール、タカリ、ネワールへと移動していることが理解できる。これは、前述した様に、潤沢な農地を最初に持っていた農本主義のバフン、チェトリが、だんだん貧困化して土地を放出し、それら商品化した土地をビジネス指向のマトワリ・カースト群が買い取る趨勢を物語っている。特にポカラでは、グルン出身の「ブプ・ラフレ」（元グルカ兵；中にはマガール出身もいる）が退役後は好んでポカラで暮らしたが、グルカ兵時代に貯蓄した給料や年金などを工面してポカラの土地を買い漁る傾向が強い。ネワールやタカリの土地集積は、彼らの商業活動の成果である。永年の政情不安と国際的為替市場の不安定性から、彼らは銀行預金の完璧な安全性を信頼していない。それにまた、昨今の中国のような株式市場もネパールにはまだ存在しないし、彼らの金融財産の最も安全な投資先は「土地」なのである。だから、金が貯れば土

地を買う傾向が強い。カースト制度によって呪縛されてきた土地所有が、観光産業と都市化による土地の商品化により、盛んに売買されているのである。(実際、土地ブローカーのような商売をしている人もかなりいる。我々の職業カテゴリーでは「自由業」の中のコントラクターやポリティッシャンである。)従って、先の〈表7〉に示された土地所有の移動は、バフン・チェトリそしてダマイが土地資産の上では相対的に貧困化し、グルン、マガール、タカリ、ネワールが富裕化し土地投資をしていると読み取れるだろう。

下記の〈表8〉にバフンとチェトリの職業就業率をポカラ全体と比較した示差的構造を掲載しておく。現在も、バフン、チェトリは僅差ながら一位と二位を占める最多ジャート集団群であり、両者でポカラ総人口の40%強になる。この〈表8〉から、バフンとチェットリは、ともに①「自営農業者」の比率がポカラの(全ジャートの)平均的就業率よりも抜きん出て高いことが明白である。自営農業者率において、バフン・チェトリが二桁以上の差分で引き離していることは、ポカラ盆地の先住民として潤沢な農地を確保したことによる農本主義の伝統がまだ彼らには残っているからであろう。⑬「一般商業」の就業率は、ポカラ一般で6.3%と低調なのに、バフン、チェットリはそれよりもさらに3%前後少なくなっている。これは、農本主義の伝統から一般商業進出への消極性を示していると言えるだろう。

残念ながら、バフンやチェットリには、タカリのようなジャート単位の「親睦会」が見られない。バフンとチェットリには、四年に一度「クレン・プジャ(祖先慰霊祭)」を行う伝統があった。しかし、このクレン・プジャも昔は頻繁に実施されたと聞くと、20年ほど前にバニヤ・チェットリとクンワール・チェットリとが別々に、ほぼ同時に行ったのを最後に、それ以降一度も開催されていない。そのような祖霊慰霊祭は、ポカラ出身で出世したバフンあるいはチェットリの主導で同族の「浄財」を当てにして開催されるのが常で、開催のための常設運営組織も資金計画もない。したがって、誰かよほど資金力と組織力に突出したバフンやチェットリが世に出て、自分を生んでくれた故郷に錦を

表8 ポカラ平均と比較したバフン・チェットリの職業構造

(%)

職業カテゴリー	バフン		チェトリ		ポカラ平均
	ジャート内比	差分比率	ジャート内比	差分比率	
①自営農業者	30.9	+12.4	28.6	+10.1	18.5
②経営者	0.10	-0.11	0.09	-0.12	0.21
③家内労働者	12.1	-6.5	15.5	-3.1	18.6
④賃金労働者	0.91	-2.65	1.98	-1.67	3.56
⑤恩給生活者	0.02	-0.01	0.02	-0.01	0.03
⑥サラリーマン	0.79	-0.03	1.15	+0.33	0.82
⑦児童学生	33.4	+3.8	28.5	-1.1	29.6
⑧公務員	3.02	+0.92	3.36	+1.26	2.10
⑨外国機関	0.38	-2.69	10.6	+7.53	3.07
⑩医療関連	0.78	+0.03	0.92	+0.17	0.75
⑪法律金融	11.8	+11.15	0.54	-0.11	0.65
⑫製造業者	0.80	-0.38	1.34	+0.16	1.18
⑬一般商店	3.42	-2.88	2.58	-3.72	6.30
⑭学校教育	1.04	+0.27	0.78	+0.01	0.77
⑮観光産業	2.44	-1.54	4.13	+0.15	3.98
⑯自由業	0.74	-1.18	1.16	-0.76	1.92
⑰+⑱+⑲)	4.76	-3.18	3.96	-3.98	7.94

飾ろうという気概に恵まれない限り、クレン・プジャの再現は難しい。また、たとえそのような祖霊慰霊祭が定期的に開催されたとしても、それがバフンやチェットリの「ジャート内組織」としての現実の内部結束を強化・維持する機能を持るとも思えない。要するに、バフンやチェットリは、個々のメンバーが強い個人主義に陥っているからではなく、彼らのジャートが中途半端に大きくなりすぎたのである。これは、現在の「シャストラ体制」が存続する限り、バフンとチェットリは、政治的特権階級に留まり続けており、自分達のジャー

トの結束を高めて、更なる特権・利権を拡大しようと働きかける必要がまったくないからであるという見方もできるわけである。バフンやチェットリに何らかの政治的危機感が高まるとしたら、マオイストが天下を取って、シャストラ体制を擁護した王制がなくなり、共和制に移行した後のことであろう。2008年になり8連合暫定政権は、ネパールの王制を廃止し、共和制に移行しようと既に決意している。バフン、チェットリの危機感は今から始まるであろう。それが証拠に、ポカラのバフンやチェットリの間でもタカリのような「ジャート会」を作ろうと動きだしていることが盛んに聞かれるのである。

バフンとチェットリの職業構造の特徴は、基本的に非常によく似ているが、その類似性は、カースト社会で最も清浄なるジャートとして価値付けられた歴史性から来ている。しかし両者の間に若干の相違も見られる。バフンは、⑪「法律金融」への就業率がポカラの平均よりも11.8%の差分で突出している。法律とはネパール語を駆使する職種で、またネパール語は本来バフンの言葉である。「パンディット」として古くからヒンドゥー教文献（法典）に造詣があるとの誇りを持つバフンだからこそ、ネパール語を駆使する「ラカンダース（代書屋）」などは彼らの専門職種になるのだろう。言うまでもなく、ポカラはガンダキ州の州都であり、ろいろな政府機関、「アンチャールディシュ」（県知事、現在廃止）や「チーフ・ドメスティック・オフィサー（CDO）」などの行政官庁や地方裁判所もある中西部第一の行政都市でもある。それに銀行も多いし、外貨交換所も非常に多い。

チェットリは、「外国機関」での就業者率が平均より数パーセント高い。これは「ラフレ」（本来はグルカ兵としての海外傭兵出稼ぎ者、今では、それに足して、グルカ兵としての経歴を利用した門番・護衛など外国出稼ぎ労働者も含む）への就業がチェットリ男子にも多く見られる。筆者のチェットリの友人たちは、クウェートやドバイへ出稼ぎに行っている。そもそもチェットリは、クシャトリヤの伝統を継承し、かのジャン・バハドール・ラナ將軍（ムルキ・アイン発布で有名な）は、ポカラで生れた人だという。そしてポカラにはラナ家

の血筋を誇る人々も存在するし、それだけに、ひょろながいバフンよりも筋肉質で体力もあるようだし、グルンに負けずに海外雄飛を果たす者も決して少なくはない。

〈ネワールの場合〉

ポカラへの後発移住民で肥沃で潤沢な農地を見出せないマトワリ達は、農本主義を捨て、商業活動に活路を見いだすことになるが、タカリ族は観光産業に進出し、そしてネワールは一般商業へと進んだ。ある種の職業的「棲み分け」と言えるかもしれない。ポカラへ移住してきたネワール達は、カトマンドゥ盆

表9 ポカラ全体と比較したネワールの職業構造

(%)

職業カテゴリー	(a)ジャート内人口比	(b)ポカラ人口平均比	比率差分(=a-b)
①自営農業者	6.64	18.5	- 11.86
②経営者	0.25	0.21	+ 0.04
③家内労働者	23.4	18.6	+ 4.8
④賃金労働者	1.32	3.56	- 2.24
⑤恩給生活者	0	0.03	- 0.03
⑥サラリーマン	0.38	0.82	- 0.44
⑦児童学生	38.2	29.6	+ 8.6
⑧公務員	1.75	2.10	- 0.35
⑨外国機関	0.72	3.07	- 2.35
⑩医療関連	1.38	0.75	+ 0.36
⑪法律金融	1.32	0.65	+ 1.26
⑫製造業者	2.44	1.18	+ 1.26
⑬一般商店	12.1	6.30	+ 5.8
⑭学校教育	1.35	0.77	+ 0.58
⑮観光産業	4.36	3.98	+ 0.38
⑯自由業	1.52	1.92	- 0.46
⑰その他(+⑱、⑲)	5.84	7.94	- 2.10

地のネワール王朝がグルカ王朝に陥落された以降に、西方に逃げ出したネワール人の一部を嚆矢とする。早くからカトマンドゥ盆地で貨幣市場社会を体験してきた彼らは、カトマンドゥのネワール商人との親戚関係やコネを利用して、ポカラの都市化・貨幣市場化の波に乗って自己の商売を伸ばしていった。1980年時以降、ポカラの商工会議所のメンバーの最大集団はネワールである。大はビスケット製造業、家具製造業から、小は生活雑貨の小売業まで、ポカラのネワール商人の活躍は目覚ましい。

ネワール族が農本主義を持たない商業民であり、彼らの①「自営農業」が二桁代の差分でポカラ平均を割っていることは、納得がいく。また、⑬「一般商店」においても、ネワールが数パーセントながらポカラ平均を抜いているのは当然であろう。しかし、②「経営者」において、ポカラ平均との差分がたった0.04%しかないことは、筆者には納得がいかない。前述したように、筆者のポカラ商工会議所の1990年度の会員名簿には130人程度の会社がリストに掲載されており、その会員数の過半数を越す70人ほどが家族名からネワール人であると判定された。しかし、我々のセンサス調査ではネワール人の「経営者」は、たった16人しか存在しない。両者の差の約50人のネワール経営者はどこにいったのか？この問題は、我々のセンサスの職業調査の方法論的妥当性を吟味する重要性を含んでおり、少しはここで議論する必要があるだろう。

第一の解釈は、我々のセンサス調査は1983年に実施されているが、ポカラ商工会議所のメンバー・リストは自主申告の登録制で厳密な資格審査はおこなってはいない。この名簿リストは1990年のもので、我々のセンサス調査時から7年間の月日が経っている。この7年の間に、ネワール人会社経営者が50人程増加したと考えられなくはない。第二の解釈は、センサス調査のデータ聞き取り時に回答者が意識的な「情報操作」をしたのではないかとの懐疑を免れない。筆者は、ポカラ・センサス調査の精度を上げるためには、ポカラ住民の協力が必須であると考え、半年以上も時間をかけて、その当時の「アンチャールディシュ（県知事）」執務室に通って、彼が一筆書いた「調査許可」を頂戴出来るよ

うに努力した。彼の事務所に、自分のオートバイを駆使して十数回も単身で押しかけたのである。それでやっと彼の調査許可証を貰えたのは、1982年11月も末のことであり、その「調査許可証」を20数枚ゼロックス・コピーをして調査助手としてポカラの区分けされた担当地区のデータ採集に出かけるトリブバン大学プリティヴィ・ナラヤン・キャンパスの学生達全員に持たせて、訪問調査時に必ず調査許可証のコピーを見せて、皆様がたの調査への協力を仰ぐようにと学生達に特別の指示を与えた。そして翌月の12月1日から我々のポカラ全戸調査は開始されたのである。

このようなアンチャールディッシュの調査許可証は、少なくとも調査助手として参加してくれたネパール人学生達の士気を高めるには貢献したが、被調査者となる市民側への心理的効果はどの程度にあったのか、あまり伝わってこない。ただ、調査拒否者が予想した以上に少なかったのも、何らかの効果はあったと思っている。しかし逆に、ポカラ市民のある種の人々にとっては「警戒」される羽目になったのではないかという思いを拭い去れない。ネパールでの「徴税システム」はまだ完全に確立されてはおらず、事業所（経営者）を訪れた税務所員が租税金額を査定することを常としている。会計帳簿はあるが、完全に「二重帳簿」である習慣は不問とされている。日本でも昔、お代官様が村々を歴訪して、その年の米のなりようを観察し、年貢米の供出量を告知する制度があったが、それと似ている。もちろん、タックス・ペイヤーとタックス・コレクターとの間に「示談」も成立する。それだけに、第三者が介入してきて税金問題の調査をすることは税務所員にも経営者にも迷惑なことに受け取られるのである。不幸なことに、我々のアンチャールディッシュの許可証を開示したセンサス調査も、「経営者」の職業的身分を自白すれば、それが将来何らかの形で税金支払いの不利な証拠に利用される恐れがあると疎んじられたことは確かな事実であるかもしれない。

筆者が使用した調査助手のカースト構成は、バフン13名、チェットリ4名、ギリ3名、ネワール3名、タカリ1名の総計24名である。カースト社会で調査

助手を使用した調査を行う場合には、調査助手と被調査者とが同カーストである方が、異カーストであるよりもベターな調査ができるという先輩人類学者の忠告に応じて、種々のカーストの大学生を集め、区域配分を考える際にも、ネワール人地域にはネワールの調査員、タカリ地域にはタカリの調査員と対応できるように配分したはずだが、全てそのような対応ができるほど細かい立案は不可能であり、非ネワールの学生がネワールの経営者を調査したことも起こったのであろう。我々の調査員の大方はバフンの学生で、彼らがネワール人のデータ取りに行った場合に、調査に必要な良いラポールを形成すること以前に、過去の双方のジャート間に介在するカースト・イメージがお互いに否定的に働く可能性があったかもしれない。(かつてパルバティ・ヒンドウーが支配層であるグルカ王朝はネワール王朝を武力制覇している。米国の大学間フットボールの試合が最大に盛り上がるのは、北部の大学と南部の大学とがぶつかりあう南北戦争の因縁試合なのである。)したがって、バフン・チェットリの学生が調査に来た際に、職業を「会社経営」などとは言わずに、「家内労働」、「一般商店」、「自由業」のような税金との関連が薄くなる返答をした可能性は考えられよう。これは、調査助手を採用せざるを得ない大規模調査の調査方法論的な精度・信頼性の限界を照射しているといえる。と言いがたい。

再度、〈表9〉を見ると、⑦「児童学生」の就業率において、ネワールはボカラ平均よりも8.6%も高いことが注目される。これは、〈表7〉において、ネワールが20口パニーの土地を確保(但し1978年から82年の期間)して資産投資しているように、教育という人的投資を重視していることの現われとも言えるだろう。

〈グルン・マガールの場合〉

グルンやマガールにはグルカ兵として英国やインドに傭兵に出る伝統が続いている。1894年から1913年までのグルカ兵の民族集団別出身調査を行ったラッグスデール(Ragsdale 1990: 13-14)によれば、マガール、グルン、リンプ、ライ(いずれも「マトワリ」諸族)だけで全体の87.4%を占め、そのなかでも出身

民族集団人口あたりのグルカ兵就役者数比率は、グルンが最高になる（ただし、就役総数ではマガールに次いで第2位）。英国やインドで12年間以上の兵役を済ますと年金がつく。年金資格を得ると兵役を終えたグルンやマガールの元グルカ兵たちはネパールに帰国した後、ポカラに住みたがる。とくにグルンはそうである。一旦外国に出て、あるレベル以上の文化生活に慣れてしまうと、水も電気もないヒマラヤ山地の父祖の土地に帰って昔の暮らしに戻ることは酷なことである。（とりわけ外国暮らしを経験した女房連中はそうである。）彼らは、ポカラに定住するために、ラフレ時の給料積立金と退職金をはたいてポカラの土地を購入し、家を建てて定着する。ポカラを訪れたことがある人なら、新築まもない二階建て、三階建てのブルーを貴重にした豪華な家々がポカラ市街の方々に建てられているのを知っているだろう。それらの家々には仏教徒の印である「ジャンダ（*Jhanda*：経文旗）」が風になびいている。そんな家は、殆ど全てがラフレ帰りのグルンの現金成金の持ち家なのである。

彼らはポカラに定住後、夫々の年金額に応じた暮らしぶりをするようになる。かつてイギリス陸軍で大佐、中佐であったラフレは、年金額が大きいから、それを資本にしてポカラの「インダストリー・エリア（企業団地）」で製麺工場を始めたり、街中でタクシー会社やトラック運送会社を創業したりしてビジネスを立ち上げ、益々金持ちになるものいるし、さらにその上昇気流に乗って、国会議員になろうとする野心家も現れている。年金額がそこそこの元英国グルカ兵あがりは、ガンダキ・ホスピタルの近くに外国人用の借家を建てて、大家暮らしをしたりして平穏な隠居生活を選ぶ者もある。また資金繰り能力も精力もまだまだ残っている元グルカ兵は、兵役時代に習い覚えた英語会話、無線ラジオ、車両技術などを生かして、英語塾、ラジオ屋などの小ビジネスに乗り出す者も少なくない。さらに、年金額が少ないインド陸軍曹あがりのブプ・ラフレは、ポカラ周辺地の安い農地を確保して自給自足農業をしたり、近頃は、スクンバシ集落に割り込んで、そこのリーダーとして活躍する者にもブルンのブプ・ラフレが多い。

表10 ポカラ平均と比較したグルン・マガールの職業構造の示差的特徴

職業カテゴリー	グ ル ン		マ ガ ール		ポカラ平均
	ジャート内比	差分比率	ジャート内比	差分比率	
①自営農業者	8.17	-10.3	14.5	- 4.0	18.5
②経営者	0.12	- 0.09	0	- 0.21	0.21
③家内労働者	23.5	+ 4.9	19.6	+ 1.0	18.6
④賃金労働者	3.17	- 0.39	10.1	+ 6.54	3.56
⑤恩給生活者	0.08	+ 0.05	0	- 0.03	0.03
⑥サラリーマン	0.91	+ 0.09	1.36	+ 1.03	0.82
⑦児童学生	32.6	+ 3.0	25.6	- 4.0	29.6
⑧公務員	1.81	- 0.29	2.04	- 0.06	2.10
⑨外国機関	12.5	+ 9.43	6.27	+ 3.0	3.07
⑩医療関連	0.47	- 0.28	0.31	- 0.44	0.75
⑪法律金融	0.22	- 0.43	0.21	- 0.44	0.65
⑫製造業者	0.40	- 0.78	0.84	- 0.34	1.18
⑬一般商店	3.30	- 3.0	2.04	- 4.26	6.30
⑭学校教育	0.34	- 0.43	0.63	- 0.14	0.77
⑮観光産業	4.15	+ 0.17	5.14	+ 1.16	3.98
⑯自由業	2.63	+ 0.71	2.57	+ 0.65	1.92
⑰+⑱+⑲)	6.31	- 1.63	8.85	+ 0.91	7.94

ポカラには「ブリティシュ・ペンション・キャンプ」と「インディアン・ペンション・キャンプ」の両方があり、前者はイギリス陸軍、後者はインド陸軍で「グルカ兵」として働いたネパール人に恩給の支払いをしてくれる。これらのペンション・キャンプでは、新兵募集・採用試験も担当しており、その選抜試験は、決して容易ではない。したがって、グルカ兵として採用されるものは、グルンやマガールの青年の中でも少々の英語力があり、身体健康、頭脳優秀の精鋭ばかりなのである。グルカ兵として選抜されることは、将来の出世を約束

されたエリート・コースとして、同じジャートの若者からも羨望の目で見られているが、このような彼らの出世コースが将来いつまで続くかは今や確かではない。

英国は、ここ10数年ほどグルカ兵総数を削減する姿勢を打ち出している。かのサッチャー首相の時、英国はチリとフォークランド戦争をした。その時にフォークランド島の最も危険率の高い戦線にまっさきに突入させられたのがグルカ連隊であった。英国陸軍では英国兵とグルカ兵の間に給与格差があったし、実戦での投入先の危険率が英国兵とグルカ兵とで差別があったようである。フォークランド戦争の終了後、グルカ兵の間で自分達の英国軍内の待遇を英国兵と対等にしてくれとの要求が沸き起こり、英国陸軍当局に対して正式に申し入れがなされた。英国陸軍は、もちろん少しづつグルカ兵の待遇改善に向かう努力を約束したが、その努力は、緊迫した予算の手前、グルカ兵総数を徐々に軽減する決定をも生み出した。このグルカ兵削減の傾向は、ここ100年間、英国によってグルカ兵に迎ええられるというブリティシュ・ドリームに慣れてきたグルンやマガールの若者には、少なからず衝撃であったようである。彼らの名誉あるジャートの伝統の消滅を予期させるからである。

やや暗い将来像に重なって、現在のボカラでもっと深刻になっているのは、グルカ兵への道に憧れながら、その道が成就しなかった若者への対応策である。グルカ兵に選抜される数の方が、選抜されない若者の数よりも圧倒的に少ないことは当然であろう。このエリートへの道から転落した若者は、父祖の山村に残り農耕生活を続けるか、それともボカラの父母、あるいは親戚の家に残って、どこかで仕事を見つけなければならない。仕事が見つければ幸いであるが、見つからなければ雑多な筋肉労働の日雇いを続けて、生き延びるしかない。また他方で、外国駐在のグルカ兵達は、異国での生活に不慣れな妻が妊娠すると、ネパールへ帰らず場合が多い。ボカラに残留して出産し育児をしながら夫の帰国を待つグルンの妻たちは、生活費には困らないが、息子の育児で父親が育ったような厳しい躾を行うことが出来ない。結果的に息子をスポイルしてしまい、

父親のようなグルカ兵になる夢も失った若者達は、とりわけ母親にスボイルされたグルンの息子達は、小遣い金を母親から巻き上げて、ポカラの繁華街をギャングもどきに集団で闊歩する姿が目立っている。他のカーストの若者を見つけては、袋叩きにする事件も増えている。このようなラフレの息子達の「集団非行」の傾向は、現在のポカラ警察の最も頭の痛い問題のなのである。

グルンには、前述したように「ベテ（羊）」というニックネームが付けられている。誰か一人が模範行動をすると、皆がどっと同様の行動を真似する傾向が強い。だいたい前1995年の国会選挙でも、ガンダキ州の選挙区で、一人のグルンが候補者に名乗りを上げると、ついに8人ものグルンが芋蔓式に候補者の名乗りを上げた。結局、それらの間に立候補届け出まえに内部調節が出来ず、グルンは大票田であるにも関わらず、それぞれの候補者の間で得票が分散して、誰一人当選しなかった。その選挙での当選者は、たしかタカリのスッパ・ファミリー出の男であった。タカリのジャート特有の「統合力」でもって、スッパの親分に投票し、他のジャート・メンバーにも強力に売り込んで、少数民族の弱みを逆手に利用して当選したのである。

グルン達にタカリのような「ジャート親睦会」のようなものがあれば、もっと違う方向に進んでいるだろう。ポカラ周辺に在住するグルン達は、既に四半世紀も昔のことになるが、自分たちの浄財を集めて仏教寺院をラム・ガートに建てている。ネパール化の運動の影響下で少数のグルンはヒンドゥー教徒に改宗したが、殆どのグルンは仏教徒としての自己アイデンティティを大切にしている。このような慈善的「公共事業」なら、グルンの「ベテ」的な集団行動性格は肯定的な成果を生むが、一旦ジャート内部に競争的状况が生れると、持ち前のベテ性が逆機能してジャートが分裂してしまい、ジャート人口の多さを最大限に利用してジャートの資産力・政治力を倍增する方向には働かなかったのである。

別稿（山本2006）で、年金額が少ないプブ・ラフレは、「スクンバシ」（不法土地占拠民）集落に割り込んで、そこのリーダーとして活躍しだす者もいると

表11 「ボカラのスクンバシの出身カースト」

(山本2006：51)

主要カースト	①ボカラ人口比率 (2001年)	②スクンバシ内比率 (1999年)	③比率差分 (=①-②)
バフン	22.8 (%)	6.0 (%)	(+) 16.8 (%)
チェットリ	16.9	9.3	(+) 7.6
グルン	21.3	28.5	(-) 7.2
ネワール	10.1	6.6	(+) 3.5
ダリット	9.8	34.1	(-) 24.3
その他カースト	19.1	15.5	(+) 3.6
総 計	100.0	100.0	0.0

の説明をした。1980年代からスクンバシがボカラに顕著に増えだしたが、筆者の1997-98年度の調査では、〈表11〉の如く、スクンバシの最大人口はダリットで、その次の最多カーストは、グルンなのである。

我々の調査では、スクンバシの80%近くが職探しの経済難民である。その上に、村落での伝統的なカースト差別が嫌でボカラに逃げてきたダリットもいる。そもそもスクンバシ集団は、所有者の不明な、あるいは公的な土地で当座利用されていない土地を不法占拠して居住しているので、本質的に「コミュニティ」的性格を持っている。それ故、土地の有力者とか警察などが、何時の日にか来て、「この土地から出て行け」と圧力を加えられる可能性があるので、そのような場合に、集落民のそこでの居住権を守るためには、権力者相手にしっかりした「談判」ができる用心棒が必要となる。とりわけ、長いカースト社会の差別的伝統の下でおとなしく忍従の生活を続けてきたダリット達には、そんな場合に必要なガッツや物理的対抗力がない。だからこそ、元グルカ兵あがりのグルンが「用心棒（リーダー）」として期待されるのである。彼らは、外国軍隊の中で下士官として鍛えられた精神的忍耐力、実戦経験の有無はともあれ、日常的に訓練された武器操作・格闘訓練の技は余人に換え難い。このようなブ・ラフレのグルンも、広大な家屋敷を買うだけの経済力はないが、高額では

なくとも毎年年金を貰える身分だから、他のスクンバシよりは経済的に余裕はある。生活が困窮していないから、周辺の貧しいスクンバシに頼られたり、相談されれば耳を貸す余裕もある。だからスクンバシ集団は、仲間内にプブ・ラフレのグルンがおれば、彼を「自生的リーダー」に祭り上げ、ダリットがそのフォロワーになる機能的役割分化が成立するのである（山本2006：20-21）。

〈その他のマトワリ・カースト群の場合〉

マトワリ・カースト群の中でも、グルンやマガールは西ネパールに根拠地をもつが、ライ、タマン、シェルパ、リンブ（我々の調査資料には2人のリンブーもいる）は、東ネパールに根拠地を持っている。したがって、下の〈表12〉から見えてくるのは、東ネパールから移住してきたマトワリ諸族は、①「自営農業者」が相対的に少ない（例：タマン、シェルパ、ライ）。また、ボテは「難民キャンプ」に住んでいる人々が大半で、①「自営農業」が極めて少ないのは当然であろう。（しかし、キャンプ外に土地を購入して農業をする者がボテにも皆無ではない。）ボテの⑬「一般商店」への就業率が高いのは、固定した商店での商売ではなくて、露天商や移動販売サービス業への就業率が高いからである。〈表12〉でガルティに①「自営農業」が相当多い理由は古くからポカラの辺端地域に住み続けてきたからであろう。ガルティに⑧「公務員」が比較的高率になる理由は分らない。ただ彼らが現在住んでいる場所から考えると、ポカラの市街地から徒歩一時間はかかる周辺部であり、市街地からかなり遠くに外れたポカラ周辺にバフンやチェトリが取りこぼした土地を開墾して、農業を営んできた者が多いのである。この農業開墾への志向は、ギリとて同様である。

東ネパール出身のマトワリは、ポカラでは④「賃金労働」をして細々生きている者が相対的に多い。彼らは、トリブバン大学フォレスト・キャンパスが建設されたときに、建設工事労働者としてポカラに働きに来たが、その工事終了後も当地に居残って、現在も住み続けている者が多い。シェルパは実質人数が少ないので、その特徴を論じる際には注意が必要であろう。彼らの故郷はエベレストの麓で、エベレスト登山隊の荷物担ぎがジャートの職業であった。エベ

表12 その他のマトワリ・カースト群の職業構造

	タマン	ボ テ	ガルティ	ギ リ	シェルパ	ラ イ
①自営農業	- 7.8	-16.58	+16.6	+ 5.9	-16.98	- 9.17
②経営者	+ 0.83	+ 4.34	+ 1.33	+ 1.4	+ 0.09	- 0.21
③家内労働	- 1.6	- 8.11	+ 3.1	+ 2.8	+ 8.7	+ 0.1
④賃金労働	+13.74	+ 5.36	- 0.11	+ 2.71	+11.64	+19.14
⑤恩給生活	- 0.03	- 0.03	- 0.03	- 0.03	- 0.03	- 0.03
⑥サラリーマン	+ 0.22	- 0.30	- 0.44	+ 0.38	- 0.82	- 0.82
⑦児童学生	- 7.1	+ 0.3	-11.2	- 2.3	-23.54	-14.9
⑧公務員	- 1.41	- 1.58	+13.3	+ 0.21	- 0.58	+11.2
⑨外国機関	- 0.23	- 2.9	- 2.11	- 2.27	- 3.07	- 0.4
⑩医療関連	- 0.75	- 0.58	- 0.56	- 0.15	- 0.75	+ 3.25
⑪法律金融	- 0.65	- 0.13	- 0.13	- 0.55	- 0.65	- 0.65
⑫製造業	- 0.83	- 0.48	- 0.8	+ 0.02	- 1.18	- 1.18
⑬一般商店	- 1.46	+14.3	- 4.0	- 2.48	- 6.30	- 2.30
⑭学校教育	+ 0.27	- 0.6	- 0.39	- 0.57	- 0.77	- 0.77
⑮観光産業	+ 5.72	+ 2.66	+ 0.82	+ 1.24	+32.42	+ 0.02
⑯自由業	+ 0.85	+ 1.05	+ 0.38	- 0.82	+ 8.68	+ 6.08
⑰+⑱+⑲)	+ 0.36	+ 6.36	- 0.07	- 0.41	- 6.42	+ 6.76

レストを初登頂したヒラリー卿についたのがテムジンで、彼の名とともにシェルパ族の名声が後世に伝えられて、ヒマラヤ観光が盛んになると、シェルパの男たちにトレッキングの案内役（サダー）の仕事が定着し今に至っている。ポカラのシェルパは全てアナブルナ・トレッキングのサダー役としての出稼ぎ者である。それゆえ、シェルパの観光産業就業率は異常に高い。ポカラ在住のタマンに若干の観光産業就業者がいるのは、観光用ダンス・チームのダンサーや太鼓叩きにタマンが雇われているものが多いからであろう。カトマンドゥでもポカラでも大きなホテルで観光客用にネパール・ダンス・ショーを公

演しているところがいくつかあり、そのプログラムには必ず「タマン・シェロー」と呼ばれるタマンの歌垣・相愛ダンスがある。タマンはグルンと同様ダンスの好きなジャートなのである。

〈ダリット・カースト群の場合〉

昔は、「ナチュネ (Nachhune)」(不可触民)と呼ばれていたダリットを、現在のネパール人学者達は「職業カースト (Occupational Castes)」と読んでいる。いずれのダリット・ジャートも、昔から伝統的に父子代々が引き継いできた夫々の「職業」を持っているからである。言うまでもなく、ダリットは、ネパール社会での最も伝統的な、最も差別された「社会的弱者」であったし、今でもそうである。下の〈表13〉に示されたダリット・カースト群の職業構造を眺めてみると、以下の三つの特徴が見えてくるだろう。

第一は、ダリット・カースト群全体の①「自営農業者」の相対的比率が、サルキのみを例外として、軒並みに低い。バフンやチェットリの後を追ってボカラに入植してきたとされる彼らには、最初から農業を専業とする広大な農地を確保する意欲はなかったのであろう。昔から「ジャジマニ」制度によって、バフンやチェットリの親方に労働サービスを提供し、その反対給付として年契約の穀物をもらうという形で依存する生き方に長年慣れてきたからである。ただサルキは、田畑の耕作に使うコブ牛が死んだ場合に、その皮を剥いで、皮加工品を製造することを生業としてきたが、それだけでは食べていけないから、バフン・チェットリが取りこぼした、村から離れた生産性の悪い土地を耕作して、自給自足のための農業をやる必要があったのだろう。ともあれダリットで農業をしているものは少なくはないが、農地の質や農地面積が限定されていて、バフンやチェットリのように自家消費後の余剰農産物を市場に販売して稼げるような農業はまったく営めない。

第二に、⑦「学生」の比率が、タガダリやマトワリと比較すると、大きく落ち込んでいる。これは、基本的に彼らの「貧困度」を象徴している。ナチュネが自己ジャートの若者に「教育投資」をしてやる余裕が相対的に小さいからで

表13 ポカラのダリット・カースト群の職業構造

	ダマイ	カミ	スナール	ガイネ	カサイ	ポデ	ミヤ	サルキ
①農業	- 8.2	- 0.30	-11.8	-18.5	-16.4	-13.9	-12.6	+11.1
②経営者	- 0.12	- 0.21	+ 0.36	- 0.21	0.0	- 0.21	+ 0.01	- 0.21
③家労働	+ 0.80	+ 6.7	+12.7	+21.4	+10.5	+15.3	+20.0	+ 0.5
④賃労働	+ 3.04	+16.7	+ 6.94	- 3.56	+10.6	+23.8	+ 1.36	+11.7
⑤恩給	- 0.03	+ 0.75	- 0.03	- 0.03	+ 0.18	- 0.03	- 0.03	- 0.03
⑥俸給	- 0.28	- 0.43	+ 0.33	- 0.82	- 0.82	- 0.82	- 0.37	+ 0.05
⑦学生	-12.4	-17.6	-10.7	-29.6	- 4.3	-15.8	- 8.7	-16.0
⑧公務員	- 1.56	- 1.45	- 2.10	- 2.1	- 1.89	+ 0.98	- 1.88	- 1.4
⑨外国	- 2.62	- 2.55	- 3.07	- 3.07	- 2.44	- 2.15	- 3.07	- 2.37
⑩医療	- 0.57	- 0.75	- 0.56	- 0.75	- 0.75	- 0.75	- 0.53	- 0.76
⑪法金融	- 0.65	- 0.65	+15.7	+19.4	- 0.65	+ 0.27	- 0.65	- 0.56
⑫製造業	- 0.91	+ 2.07	- 0.42	- 1.18	- 0.97	- 0.26	- 0.73	+ 0.82
⑬商店	+24.0	- 1.88	+11.6	- 0.77	+ 5.8	+ 4.20	+27.6	- 3.68
⑭教育	- 0.68	- 0.77	- 0.58	- 6.30	+ 0.3	+ 0.46	- 0.55	- 0.77
⑮観光業	- 2.19	- 3.59	- 3.41	- 3.98	- 3.77	- 2.44	- 2.18	- 2.67
⑯自由業	+ 2.81	+ 7.3	+ 1.32	- 1.92	+ 1.6	+ 3.0	+ 1.12	+ 2.97
⑰その他	- 0.36	+ 0.23	+ 0.26	+ 32.1	+ 3.5	+ 7.43	+ 5.31	+ 1.17

あろう。だから、そのような若者は、④「賃労働」に出かけたり、③「家内労働」に残ったりするので、④と③の比率が他のタガダリやマトワリよりも高くなっている。ダリットの親からすると、自分達の子供らは、先祖代々の生業を継承したらよいので、何も高い授業料を払って学校教育を受ける必要はないとの見方が彼らには確かに見られるのである。これは、オスカー・ルイス (Levis 1968: 2-3) による「貧困の文化」が世代を超えて継承されるという言明を裏付けていると考えられる。

さらに第三の特徴として、ダリット・カーストのいずれもが、⑮「観光産業」

の就業率が平均以下より低くなっている。かってポカラ全戸調査の計画を準備していたころ、その調査に参加する予定の学生を招いてホテルの食堂で会食したことがある。それは筆者が今も時々宿泊するレークサイドのホテルであった。一人のバフンの男子学生が、出された食事を全く食べないので、体調でも悪いのかと心配したが、そうではないという返事が返ってきた。それでパーティーが終わった時に、その学生を呼んで、食事制限を実行する医学的事情あるいは宗教的事情があるのか、どうかを聞いてみた。そしたら、彼の返答は、「そのホテルのレストランのボーイに“ダマイ”の少年がいたのに気づいた。だから、ダマイが運んでくれた料理は、まったく手をつける気がしなかった」とのことであった。

ネパール人の伝統的カースト意識には、「ナチュネは汚れているから、接客業に向かない」という考え方がある。この考え方は、現在のポカラのホテル経営者は、ナチュネの人々をベッドメイキングや庭師には雇用するが、フロントやダイニング・ルーム要員には減多に雇用しないという傾向にも反映されている。また、ナチュネ自身も、同様の考え方を内面化しており、ホテルやレストランの華々しい職場には勤めに出ようとはしないのが普通である。それ故、ナチュネの観光産業就業率は他のヴァルナに比べて、最低になってしまうのである。私は、後日この事実をホテルのマネージャー（バフンで、チェットリでもマトワリでもない）に打ち明けた。ホテルのマネージャーは、彼自身は自分をチェトリだと言って職を求めてきたので、自分自身は彼がダマイだとは知らなかったとのことであった。チェトリとダリットの間にはネパール語の微妙な差異があると言われているが、筆者にはまだその差異は聞き取れない。そのダマイは、チェトリにしては、肌の色が黒いことは筆者にも分かったくらいだから、そのマネージャーは彼がナチュネであることを分かっているが、給料を下げて雇える利点を生かしてホテルのスタッフとして採用したのかもしれない。しかし、筆者がマネージャーに筆者なりの疑問を打ち明けた二、三日後から、そのダマイはホテルに姿を見せなくなった。やがてしばらくすると、本物のチェ

トリの少年が村から出てきて、そのホテルで働くようになった。このホテル・スタッフの交代をマネージャーから知らされて、筆者はしばらく落ち込んでしまったのである。自分のネパール人学生の余計な干渉を真に受けて、自分がホテルのマネージャーに余計な口出しをして、結局は、そのダマイの青年の職業選択の自由を奪ってしまったことに対する自己の軽率さを、筆者は現在でも後悔している。

ポカラの都市化・貨幣市場化の流れの中で、殆どのジャートの内部においても、またジャート間においても経済階級の二極分解が進んでいるが、ダリットにおいてはジャート間の二極化が特に激しいようである。都市化の勢いで商売繁盛となるジャートと、そうとはならない没落ジャートとの隔たりは拡大する一方である。人々の所得水準が増加すると、「スナール（金銀細工師）」の売り上げが伸び、「ダマイ（洋裁師）」は新しい洋服の注文が増え、ポカラの人々の肉の需要が増え、チキンから「コシ（断種された山羊肉）」、ポーク、マトンついには「バフ（水牛肉）」まで生産と販売を殆ど独占する「カサイ（肉屋）」は笑いが止まらない。「ミヤ」は、本来ムスリムで、牛肉を食べる習慣があるということで「ナチュネ」に入れられたのであるが、婦人のリボンや「チュラ（ガラス細工の腕輪）」を独占販売して、しっかりと稼いでいる。今ではミヤの男達の一部は「水牛」の解体処理と販売という新商売を開発し、カサイの独占市場の一角に殴り込みを掛けている。以上のジャート群は、今でもアンタッチャブルとしての差別は受けることはあるが、先祖代々続けてきた職業が都市化／貨幣市場化の時流に乗って着実に富裕化する機会に恵まれた。とりわけカサイとダマイがそうである。ポカラには、グルカ兵あがりのブブ・ラフレが多いで、比較的に金回りが良い彼らは、酒・煙草を大いに嗜むし、肉食をも好む。それにポカラの街にはネパール軍の駐屯兵舎もあるし、大きな警察署と警官宿舎もある。その様な人々も、職業がら精気を養う必要もあって肉食、とくに豚肉を好むので、カサイの上客となっている。また、都市化で生活レベルが上昇する中で、服装に金を使うものが増加しており、洋裁師のダマイは多忙になる

のみである。

このように、スナール、ダマイ、カサイ、ミヤなどのアンタッチャブルとされる人々は、ポカラの都市化・貨幣市場化の気流によって経済的に上昇しつつある。前節で、タカリのジャート親睦会がホテル協会とも重複して、中世の欧州にあった「ギルド」のような職業統制組織として機能していること、タカリは一致してポカラの観光産業の推進に貢献した原因の一つであることは既に述べた。同様の「ジャート内親睦会」をダリットの内部に探せば、ミヤとカサイにも見られる。しかし、スナール、ダマイ、カミには同様の親睦会が見られない。とりわけ、ミヤは、自分達がヒンドゥーではなくイスラム教徒であるという同一の集团的アイデンティティを持ち、四面楚歌的な環境であるからこそ自分達の内部結束を固めなければならない。彼らの棲家のある「ミヤ・パタン」の真ん中には立派な「礼拝堂（モスク）」があり、その横にはコーランの学校、さらに独自の出版所があり、毎週の金曜日にはモスクで礼拝を指揮する「説経師」に指導されたジャート内自治組織を持っている。このような内部結束が強いからこそ彼らのチュラ販売の専業が守られるだけでなく、更にはカサイの独占領域であった精肉業にまで足を踏み入れる勇氣を持てたのである。

遅ればせながら、カサイも同様の動きを見せている。2001年の夏に、筆者はカサイの友人に誘われて、彼らジャートの「親睦会」に参加させてもらった。それは基本的に歌と踊りと飲食会であったが、二、三人の政治家が呼ばれていて挨拶をしていたのが注目された。その挨拶では、ポカラ市内のバス・ターミナル周辺の美化整備で、彼らの「ミート販売」場所があるプリティビ・チョークの出店が移動させられる可能性が出たきたので、その計画を阻止させるよりも、この際にもっと広い場所への移転をポカラ市に掛け合う方が、カサイの人々には有利になるとの提案であった。今やポカラではカサイの精肉業はかなりのビッグ・ビジネスであり、その蓄積した資金を有効に利用して、ポカラ市を動かそうとする気迫が見えていた。カサイのジャート親睦会が「ギルド」的な性格を持ち出したように受け取られたのである。

筆者の知る限り、ダリットのジャート群で、ミヤとカサイ以外に「ジャート内親睦会」を定期的に開催している例を知らない。アンタッチャブルの人々は、組織作りをするのが苦手なようで、同じジャート内もばらばらで、それらが昔同様の貧困な生活を続けている原因であると思える。とくに、1980年代から顕著になる「スクンバシ」（不法土地占拠民）化現象のなかでナチュネ出身者が最大多数派となってしまう事実は、山村部でもポカラ内部でもナチュネが基本的に差別され、経済的にも最も貧しい状況にあることを実証している。しかし、スクンバシの最大多数派となっても、自らがリーダーシップを取る覚悟は出来ずに、他の根性と気迫のあるジャート・メンバーに依存する傾向が強いのである。これは、他者への依存性が強く自立性の弱いダリットのカースト的「ハビトゥス」のせいかもしれない。

ポカラの都市化による土地の値段の変化により、ナチュネの一部が資産家になった話がある。フェワタールの北側湖岸に古くから「ボデ（漁師）」の数家族が住んでいた。この湖岸地域がポカラの観光化で、1980年代になるとホテルやレストランがどんどん進出しだして、土地の値段が高騰しだした。それで彼らは、その土地を高値で売って他の安価な土地に引越しをしたのである。そして、その土地を売った資金を元手に、不動産屋を開いたり、役所で清掃夫のポストを「買ったり」して今に至っている。

我々は1983年のセンサス・データベース作りのためのポカラ全戸調査で、ポカラ市16区の「バタルチョー（*Bhatarucho*）」の主要道路（ポカラからアナプーナに登るトレッキングの主街道）の表通りに住んでいた5世帯のガイネを記録しているが、このガイネ達は、1998年のポカラのスクンバシ調査では、バタルチョーから奥まったガンダキ側の川沿いの崖っぶちの「シモル・ボテ（*Simal Bote*：地図上②）」に引越ししていた。その理由は、かつての表道路沿いの土地が高騰したので、1990年に以前の土地から徒歩5分ほど奥まった崖っぶちの現在地に移り、目下、「ラルプジャ（*Lal Puja*：土地登録証）」を申請中であったが、近郷のチェトリと現在地の土地所有権を巡って紛争中であるとのこ

とであった。彼らの土地売却の利潤がどのような効果を挙げたかはまだ未調査ではあるが、このガイネの一人が、ボカラの市役所のスタッフとして、「サーランギ（ネパールの民俗楽器である木製バイオリン）」の弾き方教室の教員を勤めているとのことであった。上昇する国際観光都市ボカラのために、その国技楽器であるサーランギの演奏方法と歌とをボカラ市民の間に保存する政策が試されているのであろう。

V ポカラの観光産業におけるマトワリの活躍状況：

ネパール王国のカースト制度とシャストラ体制の政治的枠組みの下で、伝統的に最も差別を受けているダリットは勿論のこと、マトワリ諸族も政治的差別を受けている「社会的弱者」であると論じてきた。しかし、それにも関わらずボカラの観光産業の発展の歴史は、マトワリ、とりわけ、タカリと、ダリットの一部（ミヤとサルキ）が産業化・貨幣市場化の流れを的確に掴んで、経済的に上昇していることを論じてきた。この節では、巻末の「カースト別職業分布(%)」の三つの表（〈表15-1〉から〈表15-3〉）を基に「ボカラのカースト別観光産業就業率」の一覧（〈表14〉）を作成し、次頁に掲載しておきたい。既に述べたが、「観光産業就業者」とは、ホテル、ロッジ、ゲストハウス、レストラン、ティーショップ、土産物販売店、トレッキング・旅行会社などの就業者の総体であり、ボカラの観光産業推進への「直接貢献者」なのである。この〈表14〉から、以下の四つの特徴を明らかにしておきたい。

第一点は、ボカラの観光産業就業率はマトワリ諸族一般が一番高いことは明らかである。唯一ライを除いて、マトワリ諸族の観光産業就業率は、チェットリの4.13%、バフンの2.44%、ナチュネ平均の1.7%よりも遥かに高い。ボカラ盆地のマラリア撲滅が1960年代末になされ、それ以降にボカラに進出した後発入植者のマトワリ諸族にとって、ボカラでの肥沃な農地は最初の移植民バフン・チェットリに独占されてしまっており、1970年代後半から本格化するボカ

〈表14〉 「ボカラのカースト別・観光産業就業率」

(山本1995：266)

ランキング	カースト	労働可能人口	観光産業就業者	就業率 (%)
タガダリ 1	バフン	9,784	239	2.44
タガダリ 2	チェットリ	8,879	367	4.13
マトワリ	ネワール	6,507	284	4.36
	グルン	7,689	319	4.15
	タカリ	874	166	19.0
	マガール	1,910	98	5.13
	タマン	289	28	9.69
	ボテ	572	38	6.60
	ガルティ	521	25	4.80
	ギリ	996	52	5.22
	シェルバ	66	24	36.4
	ライ	75	3	4.0
ナチュネ (ダリット)	ダマイ	1,120	20	1.79
	カミ	770	3	0.39
	スナール	524	3	0.57
	ガイネ	5	0	0.0
	カサイ	479	1	0.21
	ポデ	325	5	1.54
	ミヤ	445	8	1.80
	サルキ	1,145	15	1.31
その他 (外国人・不明者)		145	50	34.5
合 計		46,120	1,698	3.68

ラの観光産業化に活路を見出した結果が影響しているのである。しかも、マトワリは少なくとも「浄カースト」であり、ナチュネのように「客商売」には不向きな「不浄感」で見られなかったこともネパールでは大きな理由となる。

第二点は、ポカラの観光産業には、マトワリ中でも少数民族集団であるタカリが最も貢献している。マトワリの高い観光産業就業率の中でも、第一位のシェルパの36.4%は驚異的だが、その実数が24人と少ない。しかし第二位のタカリは19.0%で実数も166人で、しかも職種が特にホテル、ゲストハウス、そしてレストランに集中している。第三位がボテの6.6%であるが、土産物販売・レストランが多い。前述したように、東ネパールを故郷とするシェルパは、ポカラにはトレッキング・ガイドあるいはサードーとして出稼ぎに来ている。それに対して、タカリの場合は、本来の出身地のタコーラにも近いポカラに骨を埋める覚悟で、ゲストハウス、ホテル、レストラン、トレッキング会社などの経営に努力してきた。ジャート人口の規模の相違、ならびに観光産業に就業する覚悟・態度の相違を視野に入れると、ポカラの観光産業の基礎を造ったのは、タカリ族なのである。

第三点は、ポカラの観光産業化に応じて、ナチュネがその勢いに乗る機会は平等にあったらうか。この問いへの筆者の答えは、否である。観光産業の花形で最も就業能力があるのは、ホテルやレストランなどの「接客業種」である。しかし、ネパール人の伝統的カースト意識には、「ナチュネは汚れているから、接客業に向かない」という考え方があり、この認識ゆえに、ポカラのホテル経営者は、ナチュネの人々をベッドメイキングや庭師には雇用するが、フロントやダイニング・ルーム要員には減多に雇用しないのが一般的である。また、ナチュネ自身も、同様の考え方を内面化しており、ホテルやレストランの華々しい職場に勤めようとはしない。それ故、ナチュネの観光産業就業率は他のヴァルナに比べて圧倒的に低い1.7%にしかすぎないのである。

第四点は、ボテ（チベット難民）の観光産業への参画である。ブラッド・ピット主演のハリウッド映画『チベットでの7年』で著名となったが、1959年

に中国がチベットを自治解放区としたため、インドへ亡命する若きダライラマ14世陛下に呼応して国外に脱出したチベット難民の一部はネパールへも流れてきた。彼らの一部はポカラにチベット難民キャンプ（二ヶ所）を作って、今に至っている。これらのチベット人達は、今では難民キャンプ特産のチベット絨毯を製造し販売し、その一部は輸出したりして、ポカラの土産物産業に大きく貢献している。彼らの中でチベット仏教の伝統的な「マンダラ（曼荼羅）」を描く人も出ており、マンダラの製作と販売はフェワタル周辺でそこそこ繁盛している。さらに、デビ・フォールやポカラ内の賑わい場所に露店を掲げては、アンモナイトの化石や仏教装飾具などを観光客に売ろうするボテたちの立ち売り姿は、ポカラ名物の光景でもある。

それでは、ここで、タカリ族がポカラの観光産業の基礎作りに成功したのは、いったい何故なのかを考えてみたい。筆者の見解では、以下の四つの要因が同時にかつ相乗的に機能したからである。第一の要因は、国際的な時期的タイミングのよさがあった。①タカリが1959年に塩の道が閉鎖されたために、チベット難民と一緒にタコーラからポカラに降りてきたこと、②他方、先進国諸国では1960年代になってマス・ツーリズムが流行りだしたこと（その走りがヒッピーであろう）。③1960年少々で、WHO がポカラ盆地のマラリアを撲滅してくれ、山岳民のマトワリがポカラへ職探しに流入してきたこと。④インドと中国の援助合戦で、（将来の中印の軍事衝突の可能性を考慮したネパールへの戦略的進出の一環であったという見解もあるが）1969年にシッダルタ高速道路がバイラワと、1973年にプリティヴィ高速道路がカトマンドゥへの高速道路を設置してくれたこと。これらの現象がとんとん拍子で重なったことは、国際的なマス・ツーリストをポカラに呼びこむためには、実に幸運であった。

第二の要因は、タカリ族が「塩の道」の商業民族としての活動経験を通じて十分に適切な「文化資本」（ブルデュー 1991）を蓄積していたことにある。①まず彼らは、塩の道の独占的支配で十分な資金を確保出来ていた。したがって、彼らがタコーラからポカラに降りてきて、タイミングよく観光産業の立ち上げ

に必要な土地と建築物に投資する決断ができたのである。②種耨の同族内農民的講組織「ディクール」を同族内商人的講組織の資本を融通しあう互助組織として、同族の若い世代が企業に参入できることを刺戟し育成した。これによって、タカリによるホテル・レストラン業への集中参加がポカラだけでなく、カトマンドゥやバイラワにも拡大したのである。③それ以前タカリの商業活動で構築されていた汎ネパールの同族内の「手形交換制度」があって、ポカラのタカリが手形一本で、カトマンドゥあるいはバイラワのタカリ商人から巨額の現金を引き出すことが出来た。したがって、タカリ商人は、高額の現金を持ち歩いてネパール国内を旅行する必要がなかったのである。このシステムにより、迅速に、安全に資金移動をさせることが出来たし、彼らの商業活動のスピード化に貢献したものである。それが、タカリのポカラの観光産業化に貢献したことは言うまでもない。

第三の要因は、タカリ族のジャートが適切な程度に少数民族集団であり、かつそのジャートを統合する「タカリ・サマージュ」と呼ばれる「タカリ・クラブ」が見事に機能していることである。「タカリ・サマージュ」は、ポカラ在住のタカリが全員入会し、定例の会費を徴収して、それを共同預金と共通運営費とに分けて経営する。こうして彼らはポカラの2ヶ所に「サマージュ・ガレ」（クラブ・ハウス）を所有し、そこで色々のパーティや会議、タカリの人々の冠婚葬祭で儀式と会食をし、ダサインの大祝賀会を開催するのである。こうして一年を通じて始終顔を突き合わせて、情報交換をしている。しかも、ポカラの「ホテル協会」の主要メンバーは、殆どが「タカリ・サマージュ」のメンバーと重複するから、このサマージュが、西欧中世の「ギルド」のような機能をする事にもなる。だから、ポカラの観光産業は、フェワタールの湖岸地方を中心に発達してきたし、発達の推進力は、ホテル・レストラン業者の「ギルド」のようなタカリ・サマージュが生み出してきたと言っても過言ではない。しかも、タカリのジャート内部には、トップ・レベルにスーパー族がおり、その下にセルチャン、トラチャン、バッタチャンの三氏族があり、その下にヒラチャン、

ゴーチャンがある。したがって、緩い内部階級差別が残っているはずだが、これら全てがポカラ在住である限り平等にタカリ・サマージュに入っていることは重要なポイントであろう。

第四の要因は、タカリ・サマージュがよき「リーダー」に恵まれたことである。筆者は、ポカラのスクンバシ集落群のリーダーシップの研究（山本2006：3-45；Yamamoto 2007: 114-158）で、「自生的リーダー」（後には「プロト・カリスマ」）という概念を提唱して、そのような自生的リーダーの正機能あるいは逆機能によって、そのスクンバシ集落がコミュニティへと成長したり、自治組織が内紛や解散をして集落が停滞してしまうようになることを具体的データで論証している。スクンバシ集落と同じように、タカリ族が、一人の指導者が全体を統合しうる程度の程よい規模の集団（あえて言うなら1,000人以内）であり、レークサイドのホテル経営者のT.氏のような好人物がそのリーダーとして長い間活躍してくれたお陰で今日のポカラのタカリの集団的成功がありえたと断言している。T.氏は、タカリの故郷タコーラでチベット仏教の高僧をしていた父親の影響で、若い頃にチベットの仏教僧院へ修行に出かけていた。それが、1959年にチベットからダライ・ラマが追放されると、彼もチベット難民と一緒にタコーラへ降り、そこで結婚してポカラに降りてきた。環俗したタコーラで結婚した彼の奥さんは、彼の幼馴染で、ポカラに住むタカリの有力者の娘さんでもあった。それでポカラに落ち着こうとした彼は、義父の紹介で、現在地のダムサイドに土地を購入し、チベット薬草治療店を開いたのである。それがやがて、ダムサイドの観光産業化の暁にホテルに業種を変えて今に至っている。やがて、T.氏は、タカリ族の長老としての義父の支援、本場のチベット仏教の寺院で修行した「ラマ」としての学識と尊敬、気さくで誠実な人柄とでいつしかタカリ・サマージュのリーダー格に押し上げられていったのである。筆者は、1978年に初めてポカラでT.氏のホテルに宿泊させてもらった時は、同行してくださった飯島茂先生によってT.氏に紹介してもらうことが出来た。それが縁で、その後ポカラに行くたびに筆者は彼のホテルを定宿とさせてもらっている。

だから、彼がポカラのホテル協会の会長をし、タカリ・サマージュの会長をしたりして活躍するのを見てきた。数年前には、日本山岳協会を助けて「ポカラ・マウンテン・ミュージアム」を作り上げた影の柱も彼であり、最近では「アナプーナ・アーチェリー・クラブ」を創設して、オリンピックにネパールのアーチェラーを（しかもポカラから）出そうと努めている。筆者は、彼のライフ・ヒストリーとホテルのサバイバル術の紹介を別稿で論じたいと準備している。

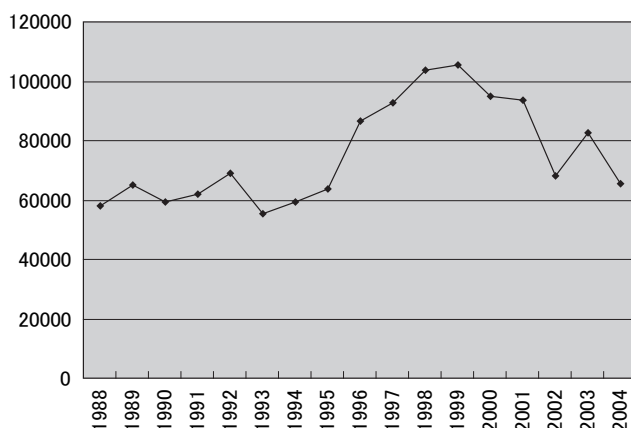
2003年には「アナプーナ・アーチェリー・クラブ」の創立を祝って、「カトマンドゥ・アーチェリー・クラブ」とが、このナディプールにあるタカリ・サマージュの屋敷内で合同のアーチェリー記念大会を開催した。これらのアーチェラーは、タカリ、マガル、グルンの連合体であると同時に、そのメンバーにはネパールの警察・軍隊・役人の退役者が多いのが特色である。言わば、マトワリのベテラン OB 会の色彩も見えてくる。

タカリ族は、ジャート内結合と相互扶助を最大化することで、少数民族集団ながらジャート内ビジネス・ネットワークの情報交換や相互扶助を強めるとともに、ポカラでのどのドミナント・ジャート群（バフン、チェトリ、グルン、ネワール）にも見られなかった自己ジャート内の経済階級の乖離を防せようと努力してきたことが、タカリ族の成功の重要なポイントであろう。

VI 結論：観光産業における社会的弱者の成功と限界

ポカラの観光産業発展の原動力は、少数民族タカリに負うところが多い。タカリは、少数民族であり、またカースト制度下のネパールでは「政治的弱者」でもあった。それに関わらず、タカリがポカラの観光産業を発展させた成功要因を、四つ列挙しておいた。しかし、前節で列挙した最初の要因、タイミングの良さは、タカリ族に内在する自前の要因ではない。たまたま、ポカラに観光産業が誕生する方向での種々の外的・国際的要因が同時期にシンクロナイズ

図1 ポカラへの国際観光客の年次別総数



したと言うしかない。したがって、タカリ族に内在する成功要因のみを取り上げりならば、以下の三要因に限られる。①「塩の道」の独占支配の経験を蓄積したことから獲得した「文化資本」（原資本・ノウハウ・ディクール・手形交換網などの総体）があったこと。②タカリの人口規模が一千人以下という一人のリーダーが統治する適正規模であったこと。自分達が少数民族で他のジャートとは異なるという意識が、「タカリ・サマージュ」というジャート親睦組織を有効な情報交換と冠婚葬祭互助組織にして、ついには「ギルド」（ホテル協会との重複により）のような性格さえ持たせたことになる。そして③タカリには、昔から敬虔なチベット仏教徒が多いので、タコールの高僧の息子で、チベットで修行した元ラマのT.氏がリーダーとして活躍する土壌があったことは幸いであった。T.氏がタカリ・サマージュ会長、ホテル協会会長を永らく努めたことで、ジャート内部の貧富差の発生を防ぎ、ジャート内の派閥競争や分裂をふせいで、ポカラ在住のタカリ族の結束を高めたことは、評価されねばなるまい。

言うまでもないが、本来、「余剰」の部分に依存する観光産業は、国内的・国際的政治情勢や景気の影響を受けやすい。上記の〈図1〉は、ポカラ観光客の

統計をグラフ化した「ポカラへの国際観光客の年次別総数」である。(但し、この国際観光客にはインド人を含む外国からの観光客で、ネパール人観光客は含まれていない。)ネパール(ポカラのみではない)への国際観光客は、1970年には年間4万人近くになり、その後順調に伸びて、1979年には殆ど16万人に手が届くところまで急増した(山本1998:図1-1)。ポカラ観光局には、その当時の統計データが見つからないので、ネパールへの国際観光客の約半数がポカラにも来ると想定してみても、(現在の国際観光客のデータでは大体そんな比率が出ている)、1970年から1980年までのポカラに来た国際観光客は2万人から8万人へと倍増したものと考えられる。

その後、1979年に中東のイランでイスラム革命が勃発し、その翌年の1月にはサダム・フセインのイラクがホメイニのイランに挑戦してイラン・イラク戦争が勃発し、その後8年間にわたって戦争が継続された。さらに、1979年に、ソ連はアフガンに軍隊を送り込んで、それによる人的・経済的消耗がソ連の共産党体制の屋台骨を揺るがすようになる。その結果、東欧一帯でソ連共産党支配から離脱しようとする各国の「民主化運動」がドミノ現象を起こして世界は冷戦終焉へと突入する。そのような国際情勢の流動化と緊迫でせっかくのマス・ツーリズムのブームは勢いを奪われてしまい、古くからの欧州からのネパールへの国際観光客の総数はどんどん減少していった。

「ネパールの民主化」が1990年11月の新憲法発布で始まり、翌年5月には多政党民主主義を国是とした新憲法の下での初めての国会選挙が実施された。新生ネパール王国の船出という開放感から、外国からの資本参加も盛んになり、新しい航空会社、新しい銀行、新しいバス会社、新しいホテルが出来て、それまで頭打ちになっていたポカラを訪れる国際観光客の総数も1995年から徐々に増加しようとしていた。この回復には、ポカラのホテル協会などが音頭を取って、経済成長著しいインドの中産階級層が夏の避暑地ならびに冬のバケーションにポカラへの観光を呼びかけたのも、効を奏したものと思われる。ポカラへの国際観光客は1995年の6万人から再び増加しだして、1998年にはやっと10万人の

大台に達したのである。この頃の世界は、エコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムが流行していたので、ネパールは格好の旅行ターゲットとなったのであろう。

しかしながら、ネパール国内では民主化運動の初期の熱気が冷め、多政党民主主義による議会政治が派閥による空転を繰り返しだすと、1996年にマオイストが「人民戦争」を開始しだしたのである。これによって、「明るい貧困の国」、平和なヒマラヤの小王国ネパールが、アルカイダとも交流がありそうな「ゲリラ戦の国」へと印象を大きく変化させてしまった。この危険国のイメージは、国際的観光市場に数年のタイム・ラグの後、決定的にネガティブな影響を与えてしまうことになる。二頁前の〈図1〉に見られるように、2000年から減少した国際観光客の総数は、2004年には再び6万人台の昔と同水準に落ち込んでしまったのである。その後、マオイスト人民戦争の悪イメージの確立により、ネパール旅行へのキャンセル・断念が欧州大陸から、日本や米国、豪州などのネパール・ファンにも拡大しており、この落ち込みは今も本格的な回復に向かうまでには至っていない。

2005年の秋に、ポカラのタカリ・サマージュ・ガレで開催された恒例の「ダサインの祝賀会」に小生も参加した。そして驚いたのは、50代以上の男女が大半で、若い世代がほんとうに数える程度しか居ない。それで若い世代は何処に居るのか？多くのタカリの年配者に質問をしてみた。その答えは、殆どがアメリカ、日本、オーストラリア、スイス、イギリスなどの先進諸国である。タカリの若者は優秀であり、外国に留学して学位をとって医者や技術者などの「専門家」として外国で就職する者が多い。（もちろん、その中にはツーリスト・ビザで労働許可証もなく外国で不法労働滞在を続ける者も存在するだろう。）タカリ族の若者の間に「ディアスポラ」現象が広がっているのである。そして、これがネパール在住のタカリ人口の急激な高齢化を引き起こしているのである。

現在、まだ第一線の経営の現場に立っている中年から高齢初期のタカリたちは、ポカラにおける観光産業のビジネスとしての将来を楽観していない。地球

温暖化の影響でヒマラヤの冠雪量が減少している。冠雪があろうがなかろうが、ヒマラヤが消滅しない限り、ポカラの観光地としての存在価値は存続するだろう。しかし、ポカラの人口増加とヒマラヤの雪解け水の減少で、ポカラは現在、水不足現象が顕著になっている。ポカラの観光資源の一つであるフェワ湖の劣化も早まっている。しかし、そんな自然環境の劣化よりも、もっと深刻な問題は、ポカラの観光産業を支えてきたタカリ族の高齢化現象であろう。そして、その原因を作り出したタカリの若者のディアスポラを許したのも現在の中年・老年のタカリ達の責任なのである。

タカリ族は、一世代が「塩の道」の交易業で立ち上がり原資本を蓄積し、その資本を元手にして二世代がポカラ（バイラワ、カトマンドゥ）に降りてきて観光産業（およびその他の商売）の基礎を構築し、それによる利潤蓄積を利用して、三世代は外国留学で医者・技術者としての高等教育に投資した挙句、その若者達がディアスポラしたままで故国に戻ってこないものである。これは、ポカラの観光産業がビジネスとして余り将来的発展がないという二世代の厳しい見方があったからこそ、彼らの子供に外国留学の投資をしてディアスポラの準備を許したのであろう。

因果なもので、親は自分の苦勞を子供たちに強制しようとはしたがない。この心情は、日本人の親もタカリの親も極めて似ている。タカリの一世は、ウマに乗り、銃を担いでトランス・ヒマラヤの商売の難しさを身体を張って、乗り越えてきた。そして、その次の二代目の世代は、ポカラの観光産業に賭けたが、（賭けるしか他の方法がなかったが）観光ビジネスは、世界の景気や国際情勢により大きく左右されることを身をもって体験してきた。しかも、1980年のスルヤ・バハドール・タパ首相が王制存続をめぐる「国民投票」を実行し、グルカ王朝の存続を強行したが、それ以来、ネパールの国内政治は安定化するどころか、どんどんと悪化し流動化していく。そんな政治的に不安定なネパールには外国からの大型投資が入ってくるわけがない。ポカラの年半分は雨季で、雨雲に覆われたヒマラヤをお目当てに世界の観光客はやってこない。世界の他

の一流の観光地は、雨季と乾季の落差がない。全シーズンを通して世界の観光客をポカラに呼び込むためには、ヒマラヤのパノラマだけが売り物のポカラでは駄目で、ポカラ独自の特色ある大型観光都市施設（例えば、ドバイに見られるようなゴルフ場、テニス場、カジノ、スイミングプール、ショッピング・センターが一体となった遊興購買設備）を常備した観光街の建設が必要である。そして、その建設は外国資金の投資なしでは全く不可能なのである。

1988年当時のポカラ観光局の記録では、ポカラには173のホテル、574のレストラン、そして12の観光・トレッキング会社があったが、筆者の記憶では、スター級のホテルは3つしかない。フェワ湖南側の「フィッシュ・テール・ロッジ」（王族経営で、英国チャールズ皇太子や日本の成仁皇太子が泊まれたポカラでは最も由緒ある3スター・ホテル）、ポカラ空港側の「ホテル・ニュークリスタル」（3スター）、その横の「ホテル・アナプーナ」（ダライ・ラマ14世が出資しているとかの噂がある2スター）である。したがって、長い間、「ネパールの観光業が直面している最大の問題は1級ホテルの不足である」（川喜田1979：103）と言われてきた。

1990年に燃え上がった民主化の熱気に誘われて、世界の商業資本がネパールへのビジネス投資を試みた時があった。本稿巻末の〈図2〉の地図で㉔のアミントラの近くのセト・リバーの河岸段丘の上に、1993年に、広大な敷地を持つ「ホテル・プルバリ」が開業した。タイ人を含む国際資本が出資したポカラ最初の5スター・ホテルで、広いプールとネワール調のレンガ建築の高級ホテルで一泊が1,000ドルのスイート・ルームもあるとのことだった。続いて1994年になると、㉔アイ・ホスピタル近くに、「ホテル・ブルーバード」と、さらにそこから少し離れた距離に「ホテル・シャングリラ」（両方ともがスイミング・プールを持つ3スター・クラス）がほぼ同時に建設された。そしてさらに同じ年に、カトマンドゥからのプリティビ高速道路のポカラへの玄関口の手前に日本資本の「ホテル・プリンス」（3スター）が建設されたのである。このホテル・プリンスは、日本からの観光客を見込んで、日本式のお風呂を準備してい

た。またホテル・ブルーバードには本格的な日本料理屋がホテル内に開店されていた。

しかし残念なことに、これらの新設ホテルはボカラの国際観光客の集客能力を過信しすぎた過剰投資であった。既に2007年の時点で、ホテル・ブルーバードは赤字経営で閉鎖され、どこかの病院のリハビリ・センターになるべく身売りされたと聞いている。また、鳴り物入りでオープンしたホテル・プルバリも赤字続きで、部屋代をどんどんダンピングしだしている。また、ホテル・プリンスも経営が苦しくて、買い手を捜しているという噂が盛んである。つまり、全シーズン型の大型施設をめざした3スター級のホテル建設に投資してみても、その投資に見合うだけの客が集まらない。だからタカリたちは、自らのホテルは老朽化するにまかせて、たいした補修もせず、従前同様に、年半分の雨季には閑古鳥が鳴く商売に嫌気をさしながら、残りの半分のシーズンに来てくれる国際観光客を何とか大切にしながら、せめて自分達の代が終わる頃ホテルを廃業する覚悟さえ固めている。筆者の予想では、今後もボカラは観光都市として存続するだろう。しかし、その観光ホテルはスター級のホテルはなくて、民宿程度に毛が生えたようなゲスト・ハウスが居残るだろう。そこでは客が自分で客室を掃除洗濯をして、炊事もする。そのような欧米でのYMCAレベルのミニマムな客サービスしかないセルフ・サービス型のゲスト・ハウスになり、現在少しづつ増えつつあるインドの中産階級の若者が夏や冬のヴァケーションに家族や友達と遊びに来るような観光町に変化していくのではないと思われる。

そのようなセルフ・サービスの観光都市になると同時に、ボカラから世界各地への「労働者ディアスポラ」は、ますます増加するであろう。ボカラは、グルンが作り上げたグルカ兵によるラフレの伝統があった。だからボカラの男達、とりわけ、マトワリの男達には、外国へ出稼ぎに行かせることへの心理的抵抗が極めて小さい。グルカ兵帰りのグルンが、ボカラ中に豪華な家を建てまわって彼らのラフレの成功談を吹聴するし、日本へ出稼ぎにいった専門家達が里帰りするたびに借家を一軒づつ建て増しするという豪気な話を良く聞くと、外国

へ行くならば現在の貧困を脱却してボカラに家の一軒でも建てるくらいの資産形成が出来るという夢がボカラのあちこちに広がっている。筆者は、2007年の夏に、スクンバシ集落でのマイクロ・クレジット・ローンによる既婚女性達の貧困緩和実態についての調査を始めたが、そこで明らかなのは、マイクロ・クレジットによるビジネス収入で貧困緩和に貢献することは、それほど容易ではない。その家族が経済的に上昇（過去の借金を全部清算したとか、経済的蓄積が出来て家屋を建てたとかいう行動）が可能になった者には、必ず、外国（ドバイ等）での出稼ぎ経験者であった夫を持つ家族であった。資産形成なら、外国へ出かけるのが手っ取り早い時代なのである。ただ、高学歴と専門職を持たないスクンバシの若者は外国の出稼ぎ用ビザを入手することが極めて困難であるので、ビザ取得用の業者に接近して、外国へ出かける前に、数ラック NRs（90万円）から10ラック（150万円）ものビザ取得費用を前借りさせてもらい、その金を20から30%の利子を付けて外国での出稼ぎ給金から返済するように仕向けられている。だから、そのビザ取得費用を全額返済するためには、余計に1年間の労働滞在期間の延長が必要になるように計算されている。それでも、アラブにオイルがある限り、ネパールの若者や中高年者は、ドバイ、アブダビ、クウェートなどに喜んでラフレとして出かけるであろうことは間違いない。

参考文献

飯島 茂

1982『ヒマラヤの彼方から ―ネパールの商業民タカリーの生活誌―』、日本放送出版会。

石井 博

1980『ネワール村落の社会構造とその変化 ―カースト社会の変容―』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

川喜田 二郎（編）

1979『朝日小事典 ヒマラヤ』、朝日新聞社。

ブルデュー、ピエール

1991 石崎晴巳（訳）『構造と実践』、藤原書店。

ターナー、ビクター

1976 富倉加奈子（訳）、『儀礼の過程』、思索社。

山本勇次

1995 「貧窮化した最上級カーストの接待様式の変容—脱サンスクリット化か?」、
『MONUMENTA SERINDICA』、No.26: 249-273。

1997 「多民族国家ネパールの国家形成とナショナリズムの特質：中西部の都市ポカラ
に見る“ネパール化”の跋行現象」、『国際研究論叢』第11巻第1号、1-14頁；第11
巻第3号1-20頁。

1998a 「中産階層の『競争エートス』の未成熟と貧困層の拡大 —ネパールの観光都市
ポカラは、なぜ貧しくなるのか—」、江口信清（編）『『貧困の文化』再考』（立命館
大学人文科学研究所研究叢書10）、有斐閣、9-54頁。

1998b 「長崎県高島の炭鉱離職者と『貧困のエートス』とその変容 —日本とネパ
ールの貧困化現象を比較することは可能か—」、江口信清（編）『『貧困の文化』再考』
（立命館大学人文科学研究所研究叢書10）、有斐閣、271-321頁。

1999 「熱帯医学とポスト・モダニズム —熱帯病の予防実践の効率的な方法論の開発
をめざして—」、5-35頁、溝田勉（編著）『熱帯病予防対策に効果を及ぼす文化と環
境・開発の均衡要因に関する研究』（平成11年長崎大学熱帯医学研究所研究集会報
告書、11-B-6）、長崎大学熱帯医学研究所社会環境分野。

2000a 「ネパールの民主化到来とスクンバシ集落の形成と発展：ポカラ市のスラムの
自生的リーダーとコミュニタス運動—」、山本勇次（編）『スラム地区住民の適応に
関する比較研究』（H10・11年度科学研究費補助金研究成果報告書）（基盤研究(A)(2)：
研究課題番号・国10041041）、大阪国際大学、3-54頁。

2000b 「ネパールの民主化運動と都市スラムの形成：スクンバシと日本近世の被差別
民との比較研究は可能か」、藤巻正巳（編）『スラム地区住民の比較文化的研究』立
命館大学人文科学研究所叢書12号、古今書院、7-32頁。

2001a 「ネパールのスクンバシの貧困に見る“認知遮断”と“行動萎縮”—開発途上国
の貧民における“健康教育支援のジレンマ”の解消に向けて—」、3-19頁、溝田勉
（編著）『熱帯性感染症対策に影響を及ぼす開発・環境・文化要因』（平成13年長崎
大学熱帯医学研究所研究集会報告書、13-B-4）、長崎大学熱帯医学研究所社会環境
分野。

2001b 「ネパールの民主化と都市スクンバシ集落の“コミュニタス”的特徴」、『立命館
大学人文科学研究所紀要』No.76、199-246頁。

2001c 「スクンバシの貧困生活に見る“イデオロギー”と“認知遮断”」、『南方文化』第
28輯、87-138頁。

2004 「ヒンドゥー教と共産主義のイデオロギー葛藤：ネパールの多政党民主主義時代
の政治的混迷」、『立命館大学人文科学研究所紀要』No.83、71-114頁。

山本勇次、北村右一

1989『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究
(1): データ収集と電算機処理の方法論的検討』(平成元年度文部省科学研究費補助
金中間報告書)、長崎大学教育学部附属教育実践研究センター。

1990『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究
(2): カースト別職業構造の分析』(平成2年度文部省科学研究費補助金中間報告書)、
長崎大学教育学部附属教育実践研究センター。

山本勇次、北村右一、西原純

1992『ピラミッドから貧困の文化まで: カースト制度の不平等構造への試論』(平成
3年度松下国際財団研究報告書)、長崎大学教育学部附属教育実践研究センタ。

Bista, Dor Bahadur

1980 *People of Nepal*, Ratna Pustak Bhandar: Kathmandu.

Caplan, Lionel

1970 *Land and Social Change in East Nepal*, University of California Press: Berkeley.

Cox, Thomas

1989 “Langtang Tibetans And Hindu Norms As Political Language: A Critical Perspective
on Sanskritization Theory”, *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 16, No.1, pp.11-
20.

Dumont, Louis (transl. by M. Sainsbury)

1980 *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications*, Chicago
University Press: Chicago.

Gurung, Harka

1992 “Representing and Ethnic Mosaic”, *Himal*, pp.12-24.

Höfer, Andras

1979 *The Caste Hierarchy And The State in Nepal: A Study of The Mulki Ain of
1854*. Universitätsverlag Wagner: Innsbruck.

Lewis, Oscar

1968 *La Vida*, New York; Panther Books.

O'Neill, Tom

1993 “People and Polity: Ethnography, Ethnicity and Identity in Nepal”, *Contributions
to Nepalese Studies*, Vol.21, No.1, pp.1-43.

Ragsdale, Tod A.

1990 “Peoples and Polity: Ethnography, Ethnicity and Identity in Nepal”,
Contributions to Nepalese Studies, Vol.17, No.1, pp.1-24.

Sharma, Prayag Raj

1977 “Caste Social Mobility and Sanskritization: A Study of Nepal’s Old Legal Code”,
Kailash, No. 10, pp.277-299.

Thapa, Deepak

2003 *A KINGDOM UNDER SIEGE: Nepal’s Maoist Insurgency, 1969 to 2003*, The
 Printhouse; Kathmandu.

Yamamoto, Yuji

1983 “Intercaste Marriages in Pokhara: Sanskritization or Urbanizations?”, 『アジア・ア
 フリカ言語文化研究』 25 号、pp.1-38.

2007 “Sukumbasi Transformation from Communitas to Community: The Birth and
 Death of ‘Proto-Charisma’”, in H. Ishii, D. Gellner, K. Nawa (eds.) *NEPALIS INSIDE
 AND OUTSIDE NEPAL, Social Dynamics in Northern South Asia (Vol.1)*, pp.115-
 158, New Delhi: Manohar.

〈アペンディクス：添付図表〉

表15-1 ボカラのタガダリ・カースト群の職業構造

(実数)

	バフン	チェトリ	インド人	他外人	ジャート不明	その他
①農業 (AG)	3019	2535	2	0	15	15
②経営者 (BI)	10	8	2	2	0	0
③家内労働 (HW)	1183	1373	80	6	14	14
④賃金労働 (LA)	89	176	23	0	2	2
⑤恩給生活 (PE)	2	2	0	0	0	0
⑥俸給生活 (SE)	77	102	3	0	2	2
⑦児童学生 (ST)	3267	2532	80	8	45	45
⑧公務員 (GOV)	295	298	4	4	1	1
⑨外国機関 (FOR)	37	105	6	0	1	1
⑩医療関係 (MDC)	76	82	1	15	2	2
⑪法律金融 (ECN)	115	48	5	0	0	0
⑫製造業 (MNF)	78	119	25	1	2	2
⑬一般商店 (COM)	335	229	104	7	2	2
⑭学校教育 (EDC)	102	69	5	6	1	1

⑮観光産業 (TOR)	239	367	29	3	9	9
⑯自由業 (FRE)	72	103	13	0	0	0
⑰その他 (OTH)	466	352	109	16	17	17
⑱無職 (XX)	306	356	15	2	3	3
⑲職業不明 (UN)	16	23	5	2	29	29
合計 Total	9784	8879	511	73	145	145

表15-2 ポカラのマトワリ・カースト群の職業構造

(実数)

	ネワール	グルン	タカリ	マガル	タマン	ボテ	ガルテ	ギリ	シェルバ	ライ
①農業	431	628	40	277	31	11	183	243	1	7
②会社主	16	9	6	0	3	26	8	16	2	0
③家労働	1523	1809	158	375	49	60	113	213	18	14
④賃労働	86	244	8	193	50	51	18	27	10	17
⑤恩給	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
⑥俸給者	25	70	5	26	3	3	2	12	0	0
⑦学生	2290	2503	308	489	65	171	96	272	4	11
⑧公務員	114	85	7	39	2	3	8	23	1	10
⑨外国労	47	963	19	119	8	1	5	8	0	2
⑩医療	90	36	9	6	0	1	1	6	0	0
⑪法金融	86	17	2	4	0	3	0	1	0	0
⑫製造	159	31	7	16	1	4	2	12	0	0
⑬商店	789	254	71	39	14	118	12	38	0	3
⑭教育	88	26	9	12	3	1	2	2	0	0
⑮観光	284	319	166	98	28	38	25	52	24	3
⑯自由業	99	202	22	49	5	17	12	11	7	6
⑰その他	207	222	15	89	8	33	17	25	1	10
⑱無職	155	254	19	77	16	26	24	47	0	1
⑲不明	18	9	2	3	0	23	0	3	0	0
合 計	6507	7689	874	1910	289	572	521	996	66	75

表15-3 ポカラのダリット (ナチュネ)・カースト別職業構造

(実数)

	ダマイ	カミ	スナール	ガイネ	カサイ	ポデ	ミヤ	サルキ	総合計
①農業	115	119	35	0	10	15	26	339	8083
②会社主	1	0	3	0	1	0	1	0	90
③家労働	217	195	164	2	137	110	89	219	8124
④賃労働	74	156	55	0	68	89	6	175	1558
⑤恩給	0	6	0	0	1	0	0	0	11
⑥棒給者	6	3	6	0	0	0	2	10	358
⑦学生	193	92	99	0	121	45	93	156	12942
⑧公務員	6	5	0	0	1	10	1	8	917
⑨外国機関	5	4	0	0	3	3	0	8	1344
⑩医療	2	0	1	0	0	0	1	0	329
⑪法金融	0	0	86	1	0	3	0	1	285
⑫製造	3	25	4	0	1	3	2	23	518
⑬商店	339	34	94	0	58	34	151	30	2755
⑭教育	1	0	1	0	5	4	1	0	338
⑮観光	20	3	3	0	1	5	8	15	1739
⑯自由業	53	71	17	0	17	16	5	56	841
⑰その他	14	14	5	0	11	23	37	29	1728
⑱無職	68	49	38	2	44	27	21	74	1624
⑲職業不明	3	0	0	0	0	0	1	1	123
合 計	1120	770	524	5	479	325	445	1145	43722

表16-1 ポカラのタガダリ・カースト群の職業構造

(%)

	バフン	チェトリ	インド人	外国人	その他	職別比率
①自営農業	30.9	28.6	0.39	0	10.3	18.5
②経営者	0.10	0.09	0.39	2.74	0	0.21
③家内労働	12.1	15.5	15.66	8.22	9.66	18.6

④肉体労働	0.91	1.98	4.50	0	1.38	3.56
⑤恩給生活	0.02	0.02	0	0	0	0.03
⑥俸給生活	0.79	1.15	0.59	0	1.38	0.82
⑦児童学生	33.4	28.5	15.66	10.96	31.0	29.6
⑧公務員	3.02	3.36	0.78	5.48	0.69	2.10
⑨外国機関	0.38	10.6	1.17	0	0.69	3.07
⑩医療関係	0.78	0.92	0.20	20.55	1.38	0.75
⑪法律金融	11.8	0.54	0.98	0	0	0.65
⑫製造業	0.80	1.34	4.89	1.37	1.38	1.18
⑬一般商店	3.42	2.58	20.35	9.59	1.38	6.30
⑭学校教育	1.04	0.78	0.98	8.22	0.69	0.77
⑮観光産業	2.44	4.13	5.68	4.11	6.21	3.78
⑯自由業	0.74	1.16	2.54	0	0	1.92
⑰その他	4.76	3.96	21.33	21.92	11.7	3.95
⑱無職	3.13	4.01	2.94	2.74	2.07	3.71
⑲職業不明	0.16	0.26	0.98	2.74	20.0	0.28

表16-2 ポカラのマトワリ・カースト群の職業構造

(%)

	ネワール	グルン	タカリ	マガル	タマン	ボテ	ガルテ	ギリ	シェルバ	ライ
①農業	6.62	8.17	4.58	14.5	10.7	1.92	35.1	24.4	1.51	9.33
②経営者	0.25	0.12	0.69	0	1.04	4.55	1.54	16.1	3.00	0
③家労働	23.4	23.5	18.1	19.6	17.0	10.5	21.7	21.4	27.3	18.7
④賃労働	1.32	3.17	0.92	10.1	17.3	8.92	3.45	2.71	15.2	22.7
⑤恩給	0	0.08	0	0	0	0	0	0	0	0
⑥俸給者	0.38	9.10	0.57	1.36	1.04	0.52	0.38	1.20	0	0
⑦学生	35.2	32.6	35.2	25.6	22.5	29.9	18.4	27.3	6.06	14.7
⑧公務員	17.5	1.11	0.80	2.04	0.69	0.52	1.54	2.31	1.51	13.3
⑨外国労	0.72	12.5	2.12	6.23	2.77	0.17	0.96	0.80	0	2.67

⑩医療	1.38	0.47	1.03	0.31	0	0.17	0.19	0.60	0	0
⑪法金融	1.32	0.22	0.23	0.21	0	0.52	0	0.10	0	0
⑫製造	2.44	0.40	0.80	0.82	0.35	0.70	0.38	1.20	0	0
⑬商店	12.1	3.30	8.12	2.04	4.84	20.6	2.30	3.81	0	4.00
⑭教育	1.35	0.34	1.03	0.63	1.04	0.17	0.38	0.20	0	0
⑮観光	4.36	4.15	19.0	5.13	9.69	6.64	4.80	5.22	36.4	4.00
⑯自由業	1.52	2.63	2.52	2.57	1.73	2.97	2.30	1.10	10.6	8.00
⑰その他	3.18	2.89	1.72	4.66	2.77	5.77	3.26	2.51	1.51	13.3
⑱無職	2.38	3.30	2.17	4.03	5.54	4.55	4.61	4.72	0	1.33
⑲職不明	0.28	0.12	0.23	0.16	0	4.02	0	0.30	0	0

表16-3 ポカラのダリット・カースト群の職業分布

(%)

	ダマイ	カミ	スナール	ガイネ	カサイ	ポデ	ミヤ	サルキ	総 計
①農業	10.3	15.5	6.68	0	2.09	4.62	5.84	29.6	8083
②経営者	0.09	0	0.57	0	0.21	0	0.22	0	90
③家内労働	19.4	25.3	31.3	40.0	29.1	33.9	20.0	19.1	8124
④賃金労働	6.60	20.3	10.5	0	14.2	27.4	1.36	15.3	1558
⑤恩給生活	0	0.78	0	0	0.21	0	0	0	11
⑥俸給生活	0.54	0.39	1.15	0	0	0	0.45	0.87	358
⑦児童学生	17.2	12.0	18.9	0	25.3	45	20.9	13.6	12942
⑧公務員	0.54	0.65	0	0	0.21	10	0.22	0.70	917
⑨外国機関	0.45	0.52	0	0	0.63	3	0	0.70	1344
⑩医療	0.18	0	0.19	0	0	0	0.22	0	329
⑪法律金融	0	0	16.4	20.0	0	3	0	0.09	285
⑫製造業	0.27	3.25	0.76	0	0.21	3	0.45	2.00	518
⑬商店	30.3	4.42	17.9	0	12.1	34	33.9	2.62	2755
⑭学校教育	0.09	0	0.19	0	1.04	4	0.22	0	338
⑮観光産業	1.79	0.39	0.57	0	0.21	5	1.80	1.31	1739

⑩自由業	4.73	9.22	3.24	0	3.55	16	1.12	4.89	841
⑪その他	1.25	1.82	0.95	0	2.30	23	8.31	2.53	1728
⑫失・無職	6.07	6.36	7.25	40.0	9.19	27	4.72	6.46	1624
⑬職業不明	0.27	0	0	0	0	0	0.22	0.09	123

図2 「ボカラ市内のスクンバシ集落分散図」

